市原市郡本（こおりもと）遺跡（第４次）

１９９９

岡　本　吉　男

財団法人　市原市文化財センター

序　　文

房総半島の中央に位置し、「王賜」銘鉄剣の出土した稲荷台１号墳や上総国分寺に代表される著名な遺跡を数多く有する市原市は、温暖な気候と豊かな自然環境を背景に、有史以来、多くの人々によって生活が営まれた地であり、随所にその痕跡も認められています。

近年、市原市においても首都圏に位置するという地理的条件から、人口の増加が急速に進み、これに伴い、宅地開発や道路網の整備・公共施設の充実など、地域開発整備が急務となっております。その一方で、遺跡を現状のまま保存することは非常に困難な状況にあり、今後さらに進むことが予想されます地域開発と埋蔵文化財の保護との調和をいかに計るかが、現在の我々に課せられたひとつの課題といえましょう。

今回ここに報告する「郡本遺跡」は市原市の北部に位置し、市原郡衙の有力な推定地に比定されるなど、この遺跡の重要性は非常に注目されています。周辺は古くからの市街化が進んでいるため、比較的調査例の少ない地域ではありますが、昭和61年以降は付近の開発に伴い、断続的に発掘調査が行なわれており、その様相が徐々にではありますが、明らかとなってきております。今回の調査では、弥生時代の住居跡をはじめ、奈良・平安時代の遺構も多数検出されるなど、多くの成果を得ることができました。本報告書は調査成果をまとめたものでありますが、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。

最後となりましたが、本書の刊行にあたり、種々御指導・御協力を頂いた千葉県教育委員会、市原市教育委員会、岡本吉男氏ならびに地元関係諸機関各位に御礼申し上げます。また、現地での発掘調査および整理作業に従事された調査補助員の皆様にも心から謝意を表します。

平成11年３月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　　小　茶　文　夫

例　　言

1．本書は、千葉県市原市郡本３丁目201－１に所在する郡本遺跡（第４次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査から、本報告書作成に至る業務は、岡本吉男氏の委託を受け、千葉県教育委員会および市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。

3．発掘調査は、以下のとおり実施した。

確認調査（市内遺跡）	担当	小川浩一	調査期間	平成９年５月12日～平成９年５月19日
			調査面積	746.01㎡のうち74㎡
本 調 査	担当	北見一弘	調査期間	平成９年９月16日～平成９年10月22日
		田中清美	調査面積	380㎡

4．整理作業、本書の執筆および編集は鶴岡英一が担当した。

5．本書に収録した出土遺物および調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

6．今回の調査コード（市原市文化財センター）は「セ253」である。

凡　　例

1．遺構実測図の縮尺は、竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡1/60、土坑1/40を基本とし、スケールを各図に表示した。

2．遺構実測図中のカマド部材・炉跡・焼土の範囲、柱穴痕、トレンチャーによる攪乱部分はスクリーントーン、遺物分布はドットで示した。

3．遺構実測図中の方位は座標北である。本文中の主軸方位は、炉跡と柱穴、長軸壁によって軸線を出し、真北から何度傾くかを示している。

4．遺物実測図の縮尺は、土師器・須恵器・陶器1/4、縄文・弥生土器拓影図1/3、土製品1/2・1/4、石器1/3を基本とし、スケールを各図に表示した。

5．遺物観察表における法量値のうち、推定復元値については〈　〉を付け、示した。また、土器の色調については、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いて表記した。

6．報告書挿図・図版に使用した遺構番号は、整理作業段階で以下のとおり変更した。

第１号竪穴住居跡←001号	第２号竪穴住居跡←006号	第３号竪穴住居跡←002号	第４号竪穴住居跡←008号
第５号竪穴住居跡←012号	第６号竪穴住居跡←015号	第７号竪穴住居跡←015号	第８号竪穴住居跡←003号
第９号竪穴住居跡←004号	第１号竪穴状遺構←010号	第２号竪穴状遺構←009号	第１号掘立柱建物跡←016号
第２号掘立柱建物跡←017号	第３号掘立柱建物跡←019号	第１号土坑←005号	第２号土坑←020号
第３号土坑←022号	第４号土坑←021号	第５号土坑←011号	第６号土坑←014号
第７号土坑←013号	第８号土坑←遺構番号なし		

本文目次

序文
例言・凡例
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　調査の概要……3
　1　遺跡の概要……3
　2　調査の経過と方法……3
Ⅳ　遺構と遺物……6
　1　竪穴住居跡……6
　2　竪穴状遺構……17
　3　掘立柱建物跡……18
　4　土坑……20
　5　遺構外出土の遺物……25
Ⅴ　まとめ……26

挿図目次

第1図　郡本遺跡と周辺遺跡……2
第2図　郡本遺跡周辺地形図（1/5,000・1/2,500）……4
第3図　郡本遺跡（第4次）遺構配置図……5
第4図　第1号竪穴住居跡実測図・出土遺物……7
第5図　第2・3号竪穴住居跡実測図・出土遺物……8
第6図　第4号竪穴住居跡実測図・出土遺物……9
第7図　第5・6号竪穴住居跡実測図・出土遺物……11
第8図　確認グリッド配置図……12
第9図　第7～9号竪穴住居跡実測図・第7・8号竪穴住居跡出土遺物……13
第10図　第9号竪穴住居跡出土遺物(1)……14
第11図　第9号竪穴住居跡出土遺物(2)……15
第12図　第1・2号竪穴状遺構実測図・出土遺物……17
第13図　第1号掘立柱建物跡実測図……18
第14図　第2号掘立柱建物跡実測図……19
第15図　第3号掘立柱建物跡実測図……21
第16図　第1～3号土坑実測図・出土遺物……22
第17図　第4～8号土坑実測図……24
第18図　遺構外出土遺物……25

第19図　郡本遺跡他出土文字資料集成……28

表　目　次

第１表　第９号竪穴住居跡出土遺物観察表……15・16
第２表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表……17
第３表　第１号土坑出土遺物観察表……20
第４表　遺構外出土遺物観察表……25

図 版 目 次

図版１　郡本遺跡周辺空中写真
図版２　第１号竪穴住居跡　第２号竪穴住居跡　第３号竪穴住居跡　第４号竪穴住居跡
第５号竪穴住居跡　調査区全景　第８・９号竪穴住居跡　第９号竪穴住居跡遺物出土状況
図版３　第２号竪穴状遺構　第１号掘立柱建物跡　第２号掘立柱建物跡　第１・２号掘立柱建物跡
第３号掘立柱建物跡　第１号土坑　第２・３号土坑　調査風景
図版４　第１号竪穴住居跡出土遺物　第４号竪穴住居跡出土遺物　第５号竪穴住居跡出土遺物
第８号竪穴住居跡出土遺物　第９号竪穴住居跡出土遺物（１）
図版５　第９号竪穴住居跡出土遺物（２）　第９号竪穴住居跡出土墨書土器　第１号土坑出土遺物
遺構外出土遺物

I　調査に至る経緯

郡本遺跡の調査は、昭和61年に第１次調査が実施されて以来、周辺の開発に伴い、記録保存の措置がとられてきた。

今回の調査は、集合住宅建設に伴い、岡本吉男氏により平成８年７月２日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が提出されたことによる。これを受けて、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査等を実施した結果、平成８年７月４日付けで包蔵地１ヶ所が所在する旨の回答がなされた。このことから埋蔵文化財についての取扱いを協議した結果、対象地域内に所在する遺跡については、緊急調査による記録保存の措置が執られることとなり、財団法人市原市文化財センターの受託事業として実施するに至った。

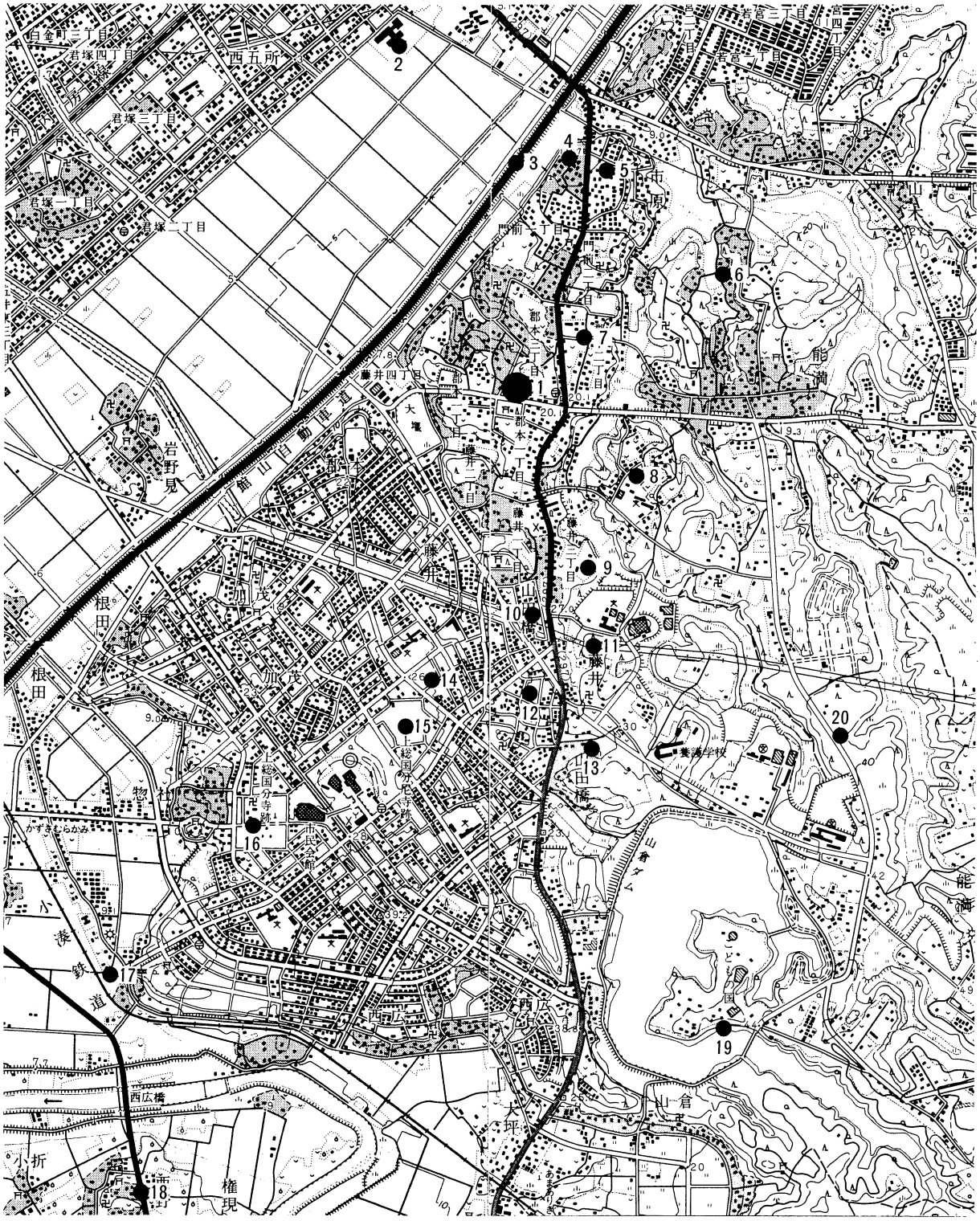
現地調査は、平成９年５月12日から平成９年５月19日まで、市原市教育委員会の依頼により、74㎡の確認調査を市内遺跡事業として行ない、遺構の有無と性格を把握したあと、平成９年９月16日から平成９年10月22日の期間で、対象面積380㎡について本調査を実施した。

II　遺跡の位置と環境

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、南北に長い広大な市域を有する。市の中央には養老川が北流して東京湾へ注ぎ、その下流域には広い沖積地を作り出している。この養老川と、北接する千葉市との境をなす村田川に挟まれた地域には市原台地が形成され、前面には東京湾と接する海岸平野が広がっている。

郡本遺跡は、市原台地の中央部付近に位置し、西側の海岸平野から入り込む２つの支谷に挟まれた東西方向に延びる標高21～22mの舌状台地上に立地する。周辺には数多くの遺跡が分布しており、同一台地上には弥生時代中期の人面土器が出土した三嶋台遺跡が位置し、郡本遺跡と同時期の弥生時代後期の遺跡としては、昭和53年に調査が行なわれ、68軒の住居跡が検出された唐崎台遺跡（第１図８）や、近年継続して調査が行なわれ、200軒を超える住居からなる拠点集落と考えられている山田橋遺跡群（第１図13）が位置している。

古墳時代から奈良・平安時代の遺跡としては、昭和63年度に調査が行なわれ、70軒以上の住居跡や10世紀代の土師器窯が検出された郡本大宮遺跡（第１図９）、古墳時代後期の大規模な集落が検出された千草山遺跡（第１図11）、「貞観十七年」紀年銘墨書土器のほか、多数の緑釉陶器や掘立柱建物跡が検出されるなど、官衙的様相を示す稲荷台遺跡（第１図10）、上総国分僧寺跡・同尼寺跡（第１図15・16）などがあげられる。また、「古国府」の転訛したものと考えられることから、国府推定地として近年調査が実施され、獣脚・瓦・磚など一般の集落とは異なる遺物が出土するなど注目される古甲遺跡（第１図７）は、郡本遺跡とも近接している。さらに、遺跡北西部に位置する五所四反田遺跡（第１図２）、市原条里制遺跡（第１図３）、稲荷台遺跡、山田橋遺跡群からは、一連と見られる古代道が検出され、この道に沿うようにして、古代の官衙関連施設が展開していたものと考えられている。



(1：25,000　五井・蘇我・姉崎・海士有木)

1．郡本遺跡（第４次）　2．五所四反田遺跡　3．市原条里制遺跡　4．市原城跡　5．光善寺廃寺跡
6．能満城跡　7．古甲遺跡　8．唐崎台遺跡　9．郡本大宮遺跡　10．稲荷台遺跡
11．千草山廃寺跡　12．宮前遺跡　13．山田橋遺跡群　14．坊作遺跡　15．上総国分尼寺跡
16．上総国分僧寺跡　17．村上川堀遺跡　18．西野遺跡群　19．孟地遺跡　20．上細工多遺跡

第１図　郡本遺跡と周辺遺跡

Ⅲ　調査の概要

1　遺跡の概要

郡本遺跡の調査は、昭和38～39年に行なわれた平野元三郎氏等によるトレンチ調査に始まり、昭和62年に実施された、㈶市原市文化財センターによる第１次調査以降は、周辺の開発行為に先立ち、断続的に調査が行なわれており、この結果、弥生時代～奈良・平安時代に亘る遺跡であることが明らかになっている。また、周辺は所在地字名である「郡本」や、郡本八幡神社境内に残されている大型建物の礎石と考えられる石の存在等により、古くから市原郡衙推定地に比定されており、非常に重要な地区として捉えられている。

以下、これまでに当文化財センターにより実施された郡本遺跡の調査履歴を見ていくこととする。

第１次調査は昭和62年に実施され、今回の調査区の西側約100mの地点にあたる。調査の結果、弥生時代後期の住居跡３軒、奈良・平安時代の住居跡５軒などが検出されたほか、７号遺構と呼称される住居跡からは金銅製の帯金具をはじめ、「得」と思われる墨書や「吉」・「丈」の線刻が施された杯などが出土している。

第２次調査は平成６年度に実施され、今回の調査区の西側隣接地にあたる。不確定なものも含め、弥生時代後期の住居跡９軒、奈良時代の住居跡２軒、平安時代の住居跡６軒と掘立柱建物跡２棟、土坑17基が検出され、平安時代の住居跡の中には、平面隅丸長方形を呈し、カマドを伴わないものがあり、杯・椀・小皿のほかに布目瓦片や鉄滓なども出土することなどから、その特殊性が指摘されている。

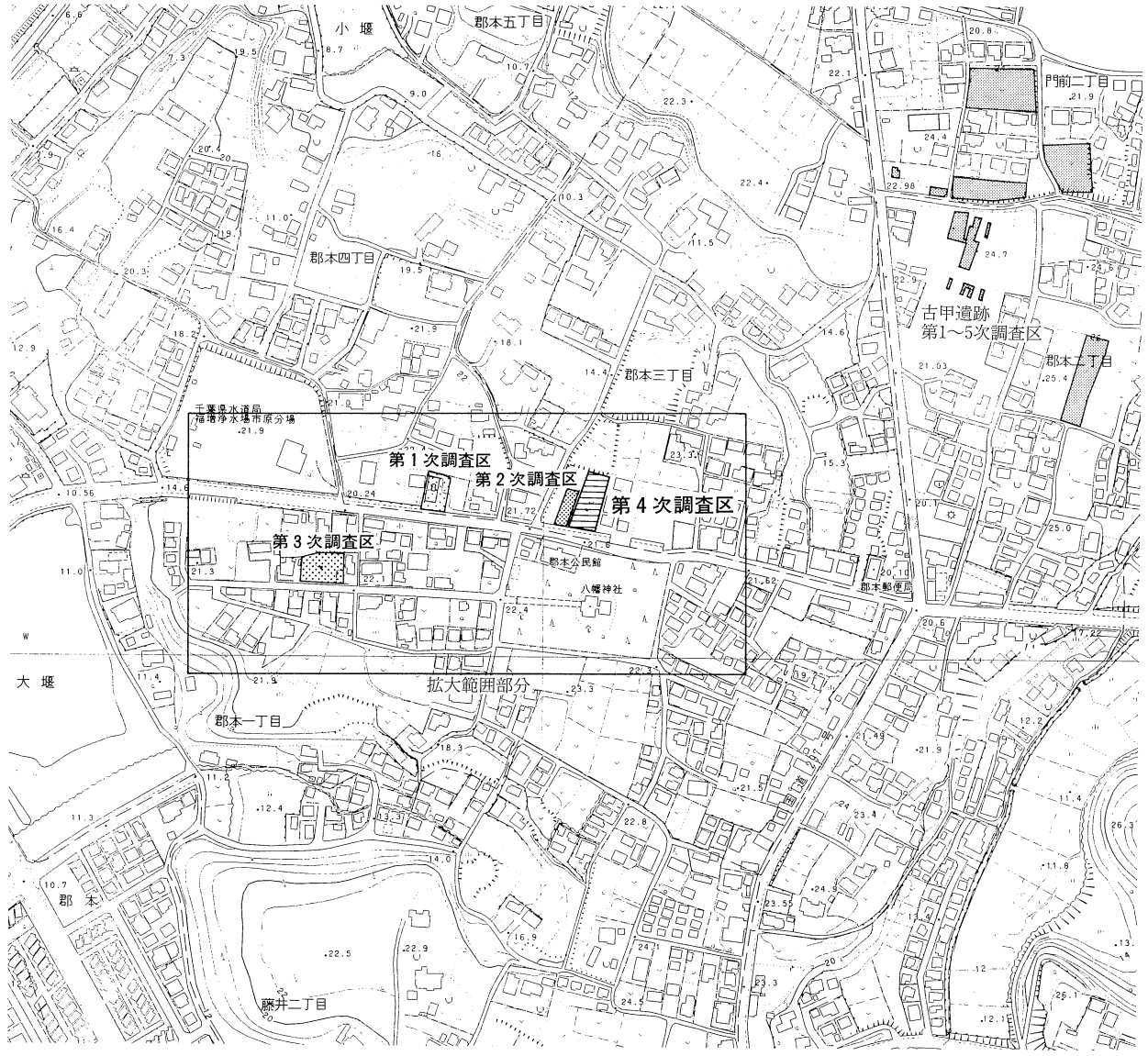
第３次調査は平成９年度に実施され、今回の調査区の南西約200mの地点にあたり、郡本八幡神社の参道沿いに位置する。古墳時代後期の住居跡１軒、27点の管状土錘が出土した奈良・平安時代の住居跡１軒、平安時代の溝状遺構２条のほか、多数のピットが検出されている。特に溝状遺構は、施設を区画するものとも考えられ、注目される。

2　調査の経過と方法

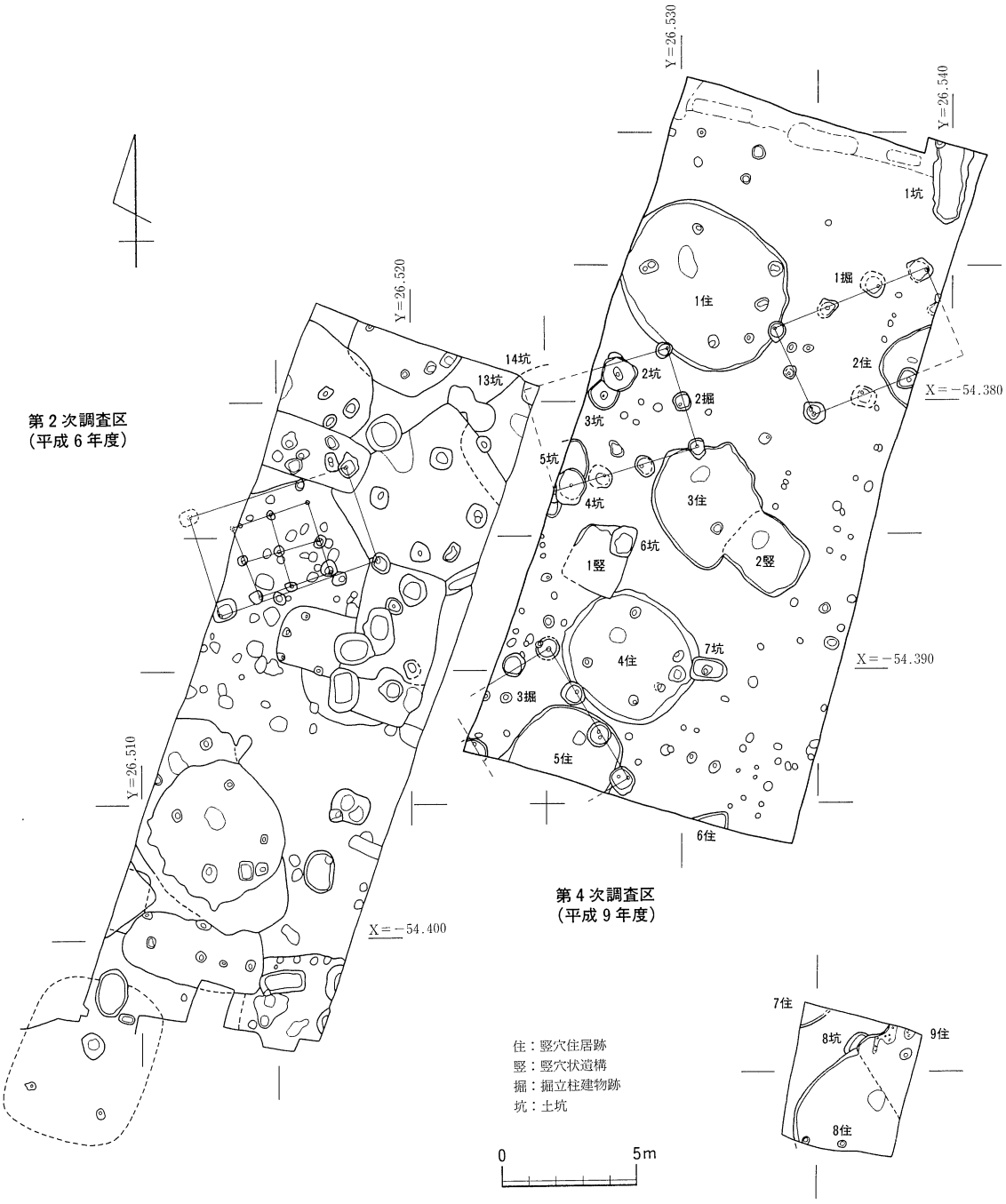
今回の調査区は、平成６年度に電気通信設備建設に先行して実施された郡本遺跡（第２次）調査区の東側に隣接する。調査は、岡本吉男氏による集合住宅建設に伴い、平成９年９月16日から平成９年10月22日まで実施した。

本調査は、重機による表土除去を行ない、遺構は確認した順序に番号を付け、調査を実施した。遺構図面は、調査区内に設定した公共座標に基づく方眼杭を基準に、縮尺1/10ないし1/20で作成した。また、写真は６×７版と35ミリ版の白黒とリバーサルフィルムを用いて記録した。

郡本遺跡（第４次）における基本層序は、第Ⅰ層が表土・攪乱層、第Ⅱ層が黒褐色土層、第Ⅲ層が暗褐色土層、第Ⅳ層がソフトローム層、第Ⅴ層がハードローム層である。



第２図　郡本遺跡周辺地形図（1/5,000・1/2,500）



第3図　郡本遺跡（第4次）遺構配置図

Ⅳ　遺構と遺物

平成９年度の調査区は、平成６年度に調査が行なわれた第２次調査区の東側に隣接しており、調査面積は380㎡である。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡７軒、古墳時代後期の土坑１基、奈良・平安時代の竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡３棟、時期不明の土坑７基、ピット群が検出された。

１　竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第４図）

調査区の北西寄りに位置し、第１・２号掘立柱建物跡に切られる。規模6.64×5.54m・壁高0.24mを測り、長楕円形を呈する。主軸方位はＮ－38°－Ｗである。壁はやや開くように立ち上がる。

柱穴は平面楕円形を呈し、径35cm・深さ２cmを測る第５ピットと、径40～56cm・深さ47～56cmを測る主柱穴４本が検出された。柱穴には複数の柱痕が認められるものがあり、建て替えが行なわれたものと思われる。

貯蔵穴は北東壁際から検出され、60×58cm・深さ40cmを測り、不整楕円形を呈する。

床は壁周辺に貼り床がなされ、平坦で堅く踏み締められていた。中央北西寄りには124×62cm・深さ６cmを測る炉跡が見られた。

遺物は、１・３・５が床面、２・４・６が覆土中層から出土したほか、トレンチャーにより粉砕された土器片が出土している。１・２は複合口縁を呈し、前面に縄文、下端に刻み目が巡らされる壺形土器の口縁部破片である。１は胎土に粗い砂粒を多量に含み、内外面に赤彩がなされる。２は胎土に粗い砂粒を多く含み、２個１組の円形浮文が付加される。３は甕形土器の口縁部破片で、口唇部は押捺により波状を呈する。４・５は壺形土器の肩部破片である。４は山形、５は平行の沈線区画内に羽状縄文が施され、４は内外面、５は外面に赤彩がなされる。６は甕形土器の頸部破片で、輪積み痕を残し、軽いナデがなされる。７は土製紡錘車の破片と思われる。厚さ1.2cmを測り、直径は3.8cm程度に復元されるが、現状では中央の孔は確認されない。

第２号竪穴住居跡（第５図）

調査区の北東寄りに位置し、第１号掘立柱建物跡に切られる。遺構の東側は調査区域外となり、規模・主軸方位ともに不明であるが、長楕円形を呈するものと思われる。壁高0.04～0.13mを測り、壁はやや開くように立ち上がる。

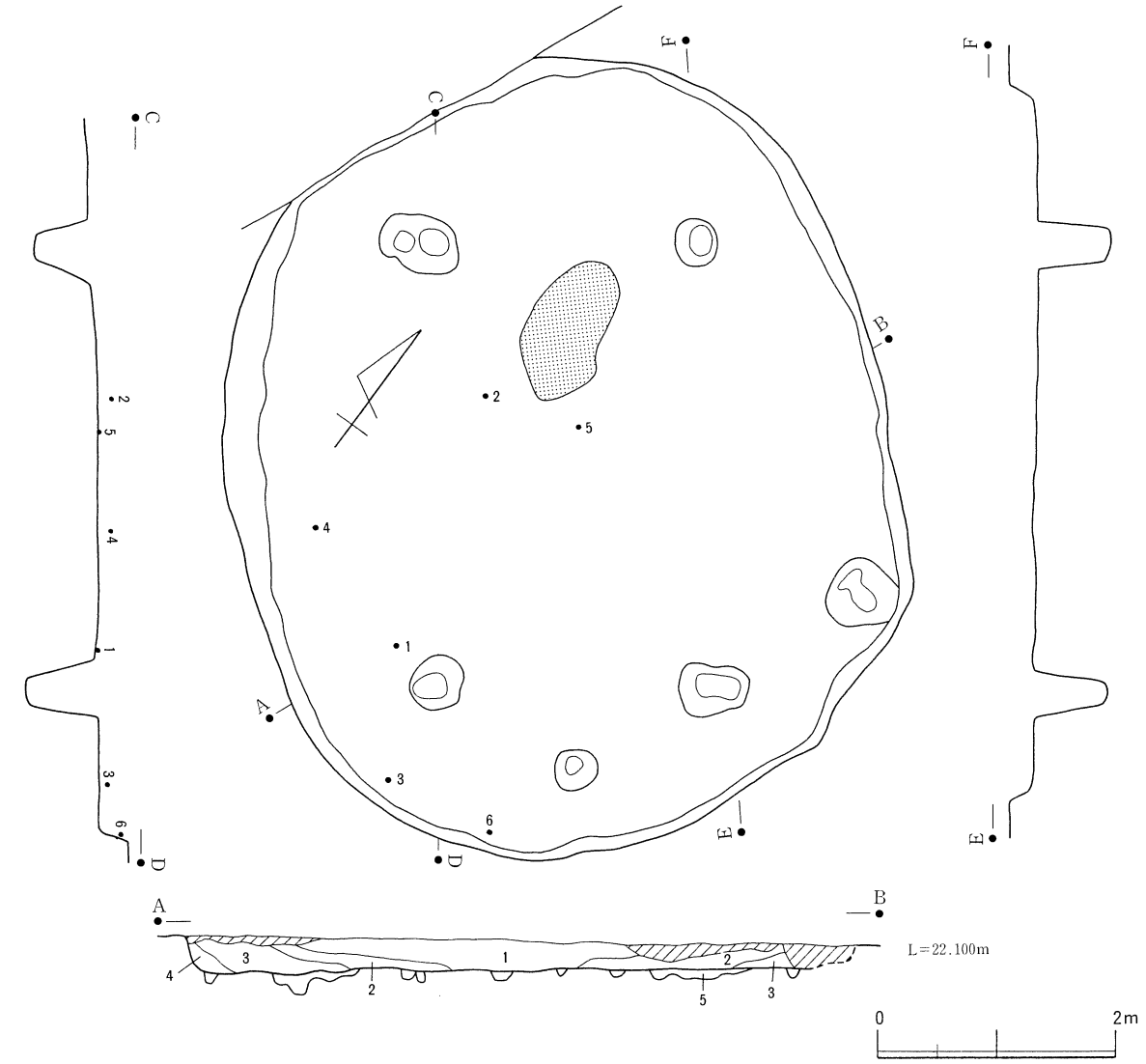
周溝・柱穴は検出されなかった。床面はソフトローム中で、やや軟弱である。

遺物は、弥生土器・土師器の細片、鉄滓がわずかに出土したのみである。

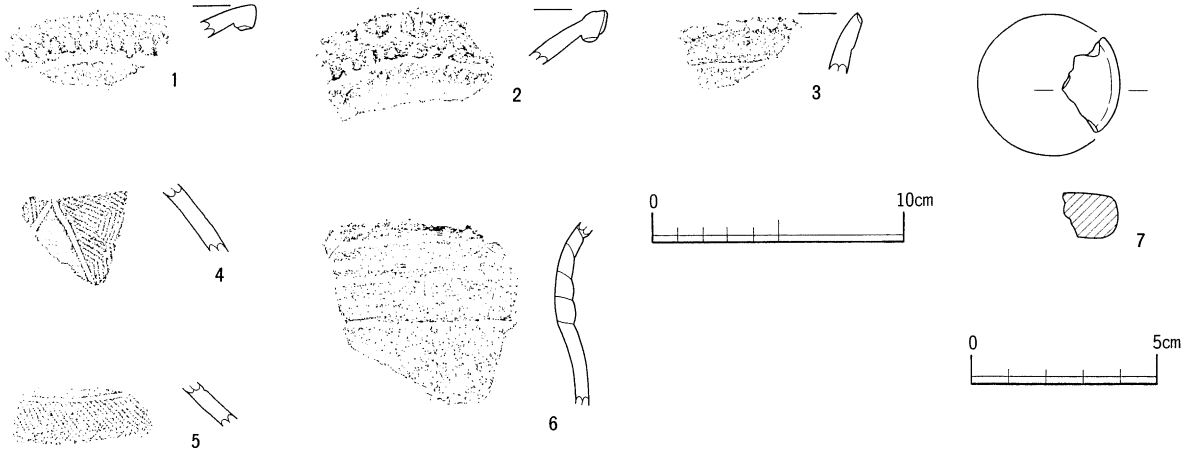
第３号竪穴住居跡（第５図）

調査区の中央に位置し、第２号掘立柱建物跡・第２号竪穴状遺構に切られる。攪乱のため不明瞭であるが、規模4.2×3.8m・壁高0.15mを測り、不整楕円形を呈する。主軸方位はＮ－30°－Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

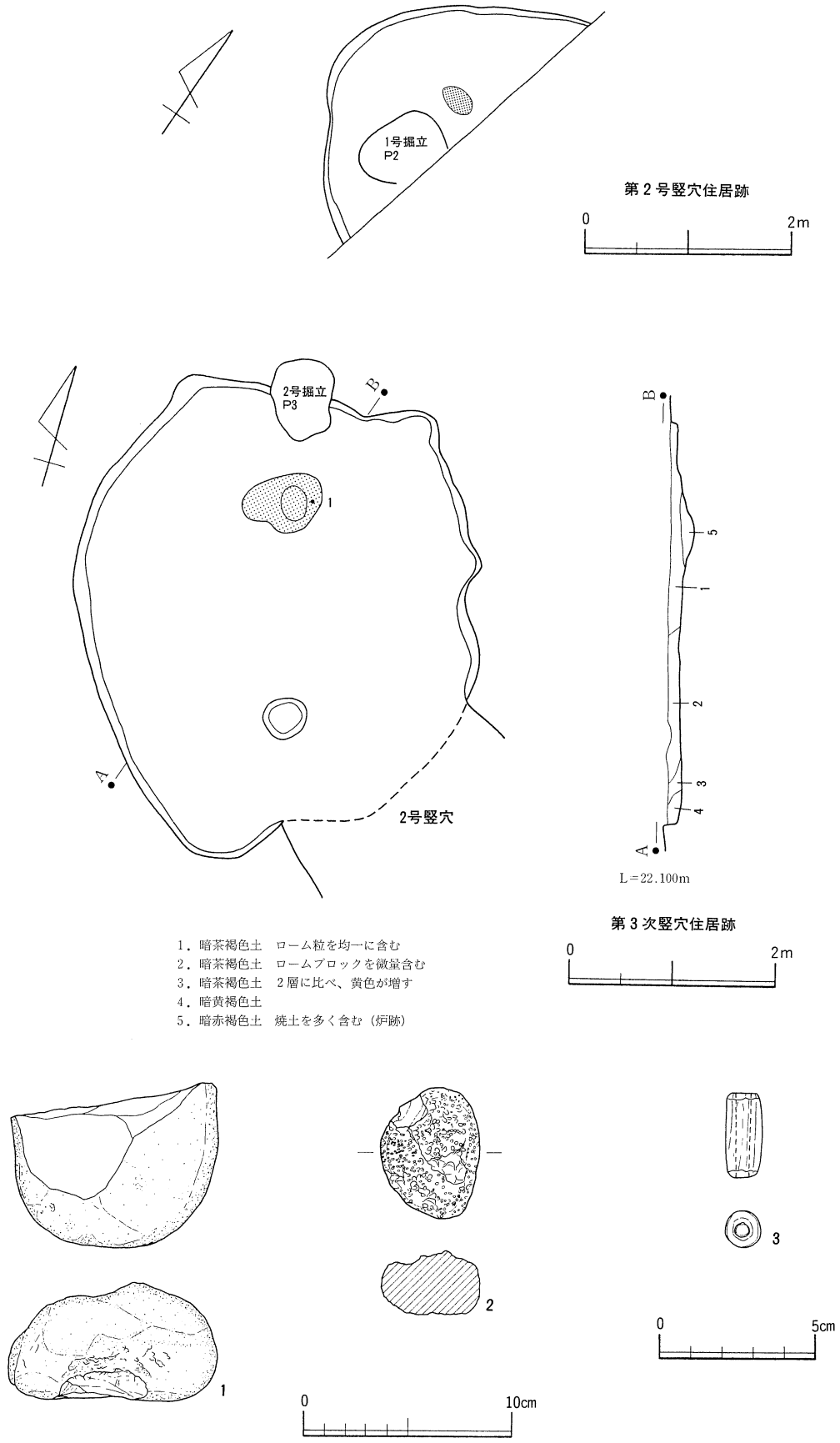
柱穴は平面楕円形を呈し、44×37cm・深さ10cmを測る第５ピットを検出した。



1．暗褐色土　ローム粒を微量含み、焼土粒・炭化粒も混じる
2．暗褐色土　ロームブロック・焼土粒・炭化粒をまばらに含む
3．暗褐色土　ローム粒を均一に含み、焼土粒・炭化粒も混じる
4．暗褐色土　ロームブロックを主体とする
5．褐 色 土　ロームブロックを主体とする（貼床）



第４図　第１号竪穴住居跡実測図・出土遺物



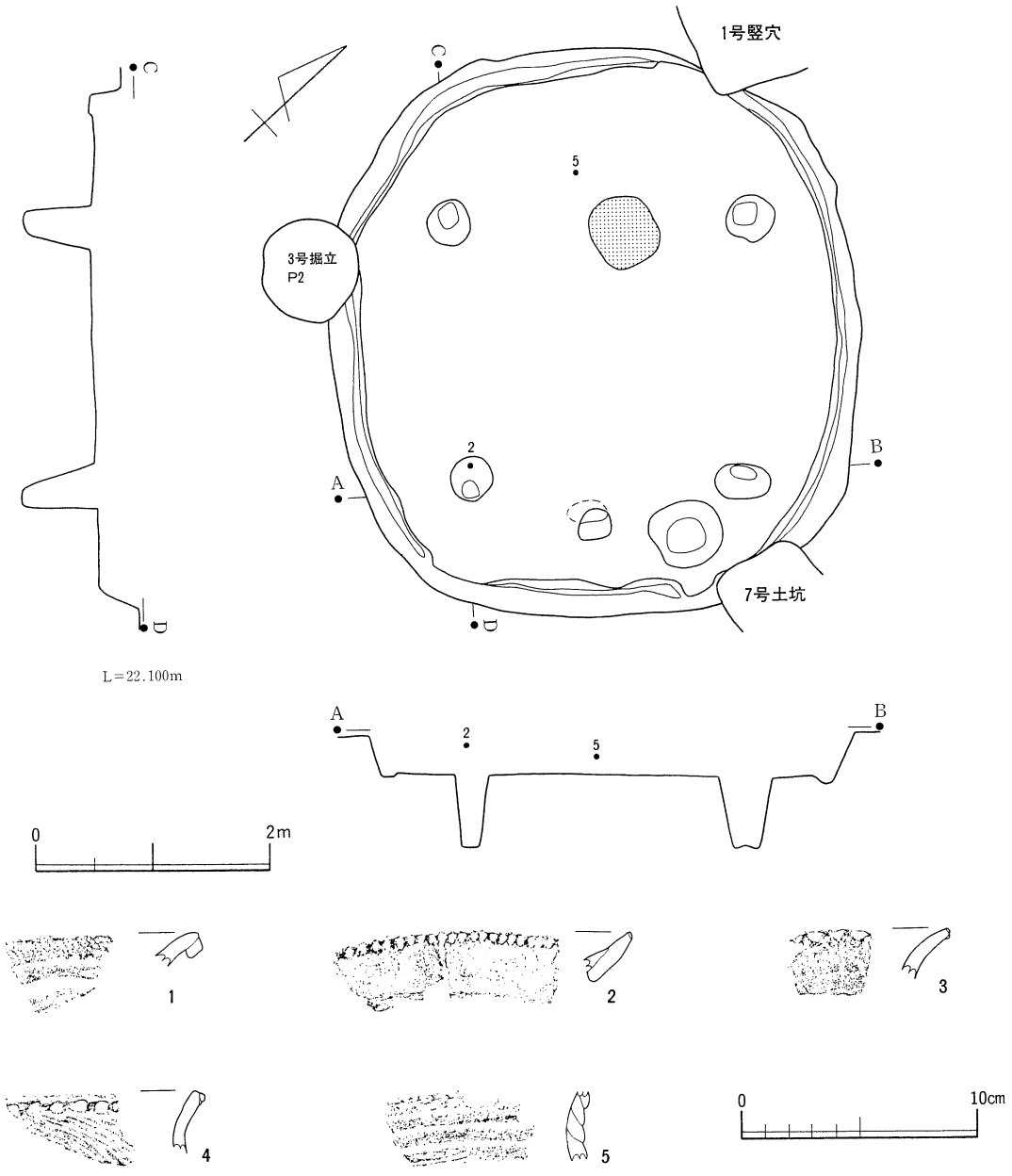
第5図　第2・3号竪穴住居跡実測図・出土遺物

床面は平坦で硬く踏み締められており、中央北西寄りには80×54cm・深さ13cmを測る炉跡が見られた。

遺物は、１が炉内から、２・３は覆土中の出土である。１は硬質砂岩製の敲石、２は軽石、３は長さ2.7cm・幅1.1cm・孔径0.4cm・重量2.4ｇを測る管状土錘で、丁寧な面取りがなされる。

第４号竪穴住居跡（第６図）

調査区の南側に位置し、第１号竪穴状遺構・第３号掘立柱建物跡・第７号土坑に切られる。規模4.86×4.52m・壁高0.3mを測り、長楕円形を呈する。主軸方位はN－48°－Wである。壁はやや開くよ



第６図　第４号竪穴住居跡実測図・出土遺物

うにして立ち上がる。

周溝は、幅８～14cm・深さ２～８cmで巡り、部分的に途切れる。

柱穴は、平面楕円形を呈し、径37～40cm・深さ56～62cmを測る主柱穴４本と、径27cm・深さ30cmを測る第５ピットを検出した。第５ピットは壁方向から斜めに掘り込まれていた。

貯蔵穴は南西壁際から検出され、径57cm・深さ36cmを測り、楕円形を呈する。

床面は平坦で硬く踏み締められていた。中央北西寄りには62×54cmを測る炉跡が見られた。

遺物は、覆土中層から上層にかけて弥生土器・土師器の細片と鉄滓が少量出土している。１・２は複合口縁を呈する壺形土器の口縁部破片で、１は前面に縄文、２は口唇部に刻み目が施される。３・４は甕形土器の口縁部破片で、３は口唇部は押捺により波状を呈し、４は口縁部外面に刻み目を巡らし、外面は斜位、内面は横位の刷毛調整がなされる。５は甕形土器の頸部破片で輪積み痕を残す。

第５号竪穴住居跡（第７図）

調査区の南隅に位置し、第３号掘立柱建物跡に切られる。遺構の南側は調査区域外となり、全体の1/2程度の調査である。短軸長4.0m・壁高0.3mを測り、長楕円形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－27°－Ｅである。壁はやや開くようにして立ち上がる。

周溝・柱穴は検出されなかった。

床面は平坦でやや軟弱である。北東寄りには50×46cmを測る炉跡が見られたが、掘り込みはわずかに認められたのみであった。

遺物は、３・４が覆土下層から出土したほか、覆土中から弥生土器・土師器の破片と鉄滓が少量出土している。１は壺形土器の口縁部破片で、複合口縁を呈する。粗い砂粒を多量に含み、前面に縄文、下端に刻み目が巡らされ、円形浮文が付加される。２・３は甕形土器の口縁部破片で、口唇部は押捺による波状を呈する。４は甕形土器の上部破片で、推定口径20.6cm・推定胴部最大径17.2cmを測る。口唇部は押捺による波状を呈し、胴部上位の接合部下端に刻み目を巡らせる。外面の口縁部～頸部上半には横位の刷毛調整痕が残り、頸部下半以下と内面には横位のナデがなされる。

第６号竪穴住居跡（第７図）

調査区の南隅に位置する。遺構の大部分が調査区域外に延びており、規模・主軸方位・平面形態ともに不明である。壁高は0.21mを測り、壁はやや開くように立ち上がる。

周溝・柱穴は検出されなかった。

床面は貼り床で、遺物は微細な瓦片が１点出土したのみである。

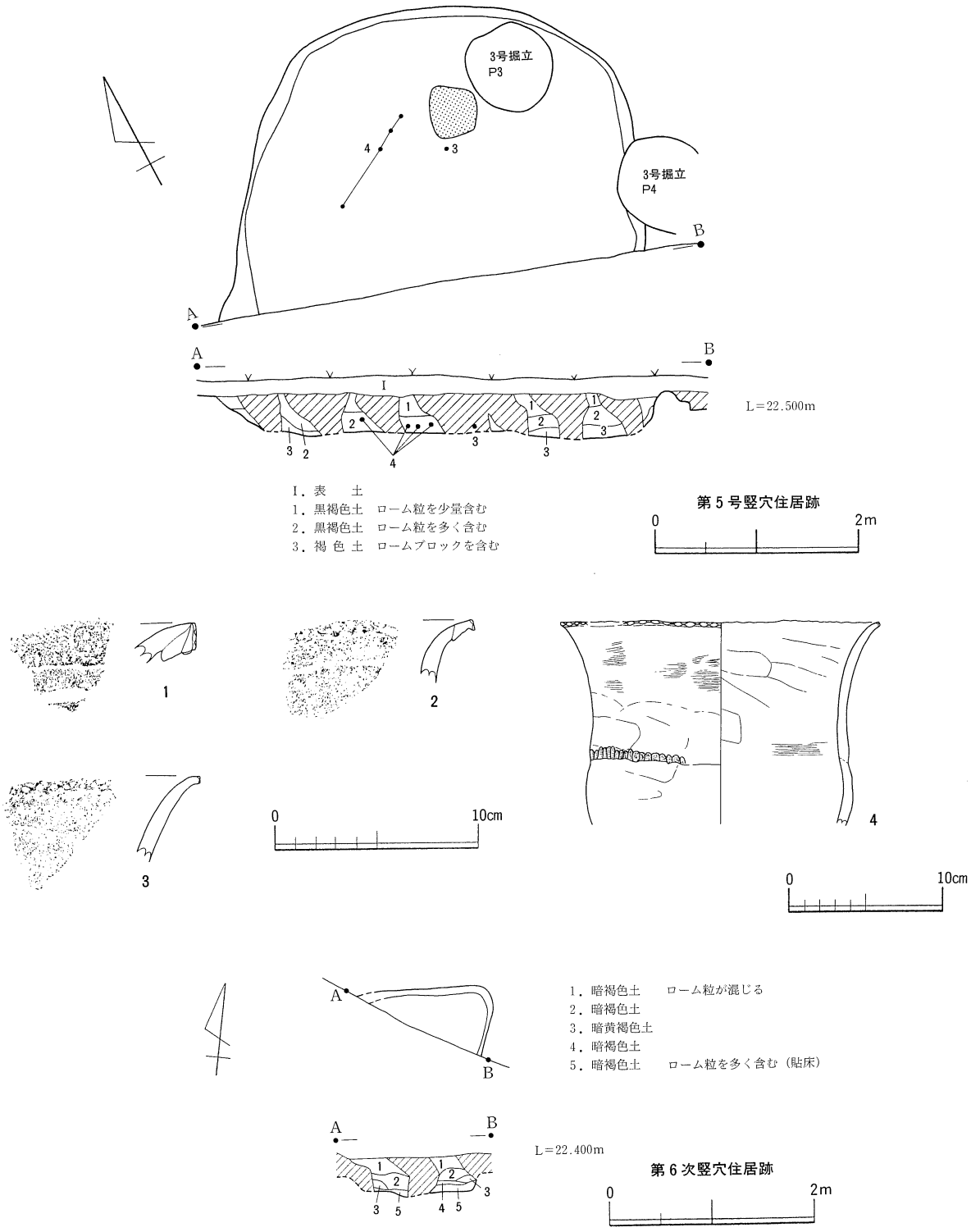
第７号竪穴住居跡（第８・９図）

南側調査区の北隅に位置する。遺構の大部分が調査区域外に延びており、規模・主軸方位・平面形態ともに不明である。壁高は0.20mを測り、壁はやや開くように立ち上がる。

周溝・柱穴は検出されなかった。

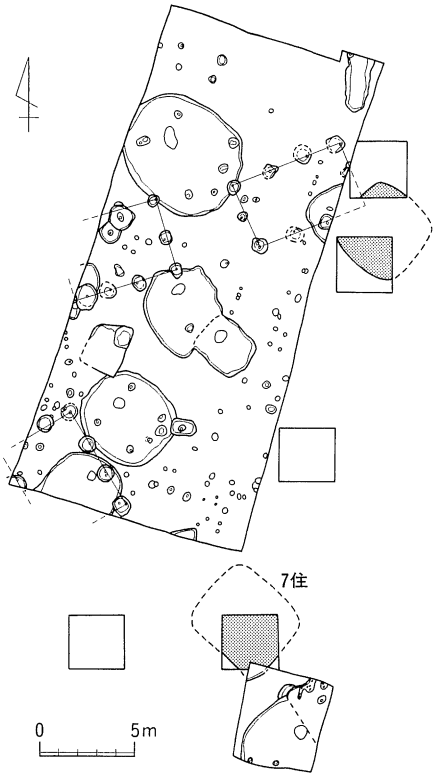
床面はソフトローム中でやや軟弱である。

遺物は、今回の調査区内においては全く出土しなかったが、先に実施された確認調査グリッドから、



第7図　第5・6号竪穴住居跡実測図・出土遺物

１の胴部上位に輪積み痕を残す甕形土器の破片が出土している。



第８図　確認グリッド配置図

第８号竪穴住居跡（第９図）

南側調査区の南側に位置する。第９号竪穴住居跡に切られ、遺構の一部は調査区域外に延びており、規模・主軸方位ともに不明であるが、長楕円形を呈するものと思われる。壁高は0.33mを測り、壁はやや開くように立ち上がる。

柱穴は平面楕円形を呈し、径22～30cm・深さ17～30cmを測る小柱穴が２本検出された。

床面は堅く踏み締められており、柱穴付近には焼土の分布が見られた。

遺物は、覆土中から弥生土器・土師器の細片が少量出土したのみである。１・２は複合口縁を呈する壺形土器の口縁部破片で、１は口唇部に刻み目、２は前面に縄文、下端に刻み目が巡らされ、有孔円形浮文が付加される。１は第４号住居跡出土遺物２と同一個体と思われる。３は甕形土器の口縁部破片で、口唇部は押捺により波状を呈する。４は壺形土器の肩部破片で、Ｓ字状結節文による区画と山形の沈線区画内に羽状縄文が施され、外面無文部にはミガキ調整がなされる。５は硬質砂岩製の敲石と思われる。

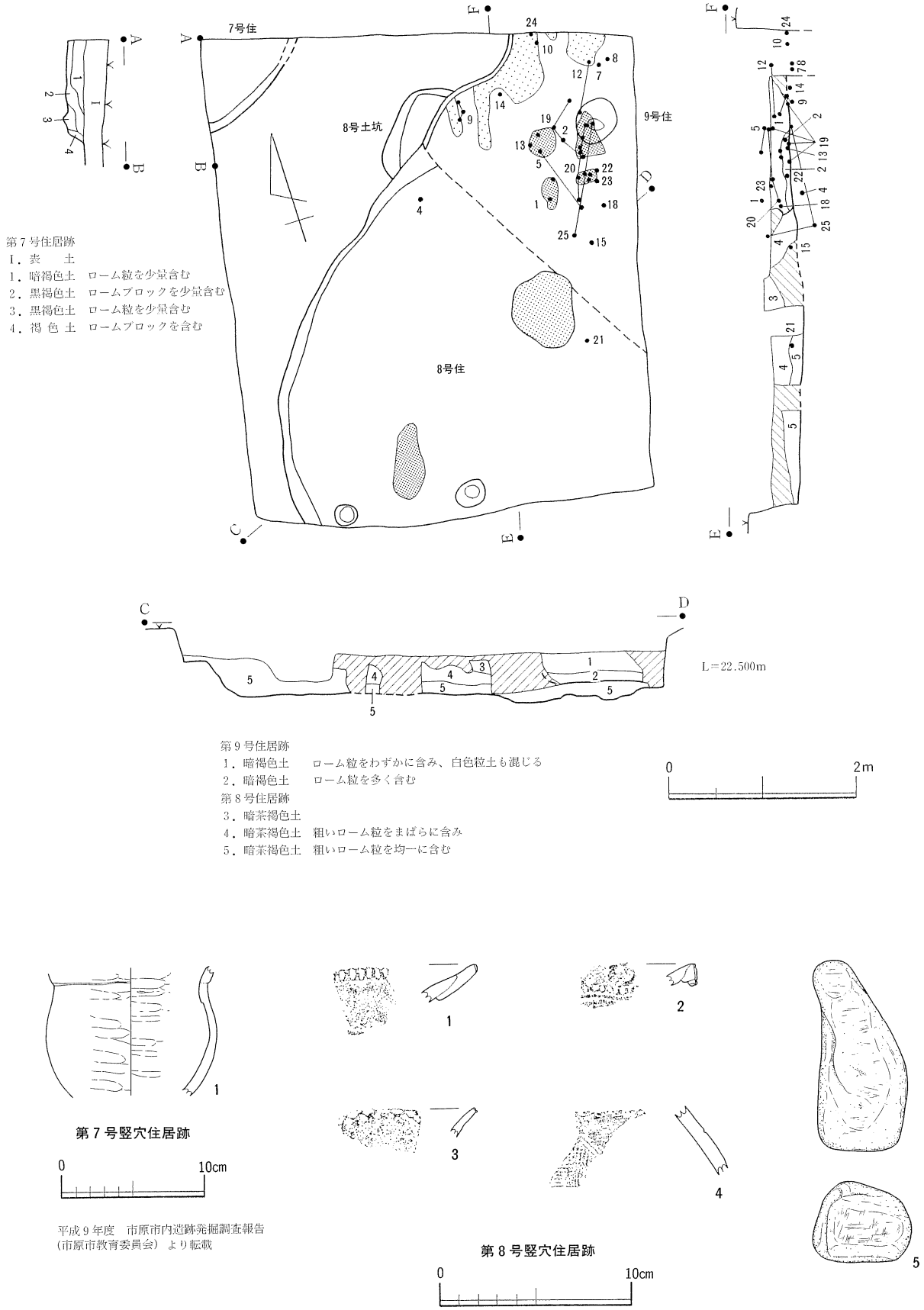
第９号竪穴住居跡（第９～11図）

南側調査区の東側に位置する。第８号竪穴住居跡を切り、第８号土坑に切られる。遺構の東側は調査区域外に延びており、規模は不明である。壁高0.24mを測り、方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－37°－Ｗ程度を測るものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

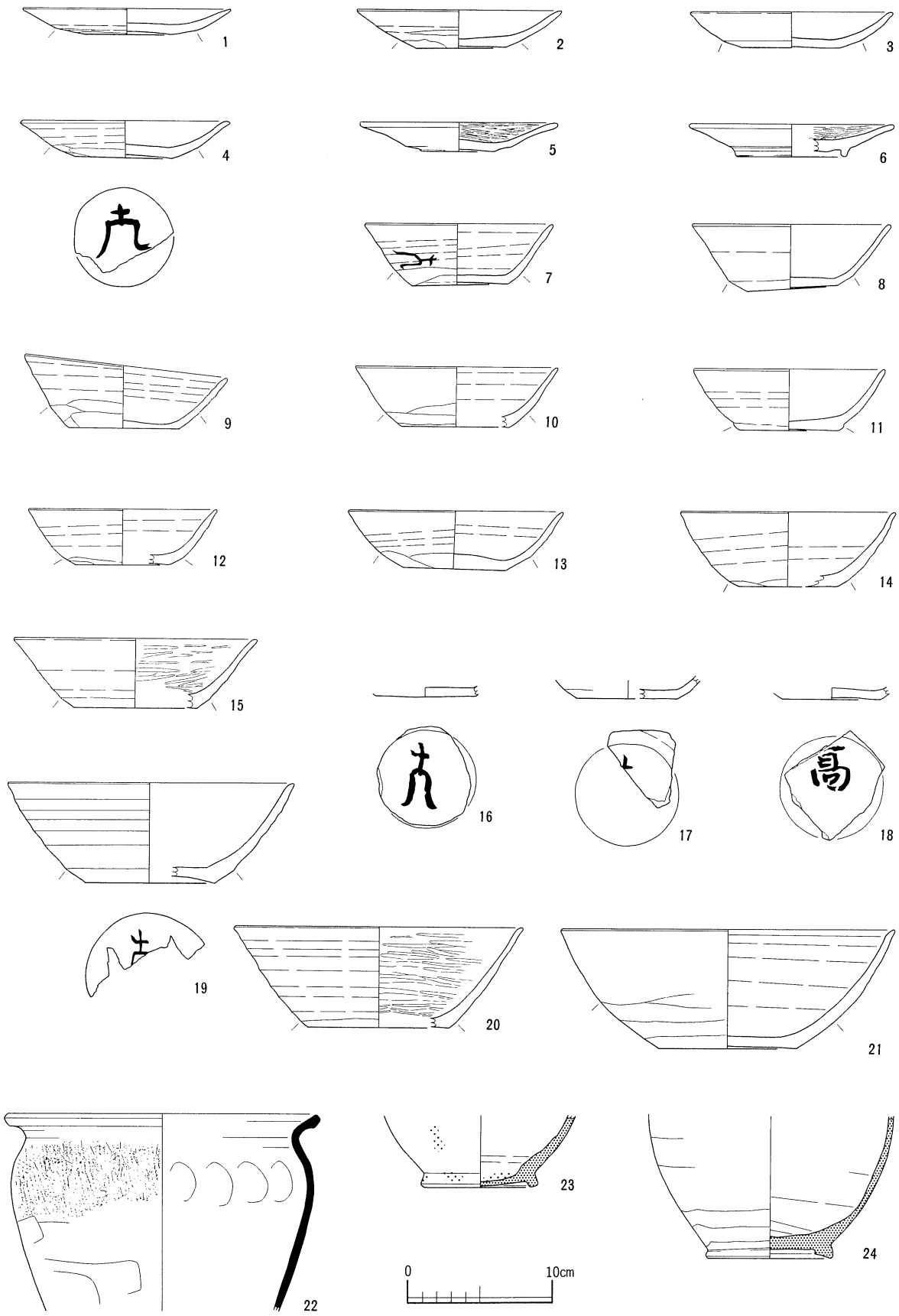
柱穴は、調査区北西隅寄りから１本のみ検出され、平面楕円形を呈し、径42cm・深さ43cmを測る。

床面は堅く踏み締められており、柱穴付近には焼土の分布が見られた。また、北壁付近には粘土が広く分布しており、崩壊したカマドの構築材と思われる。

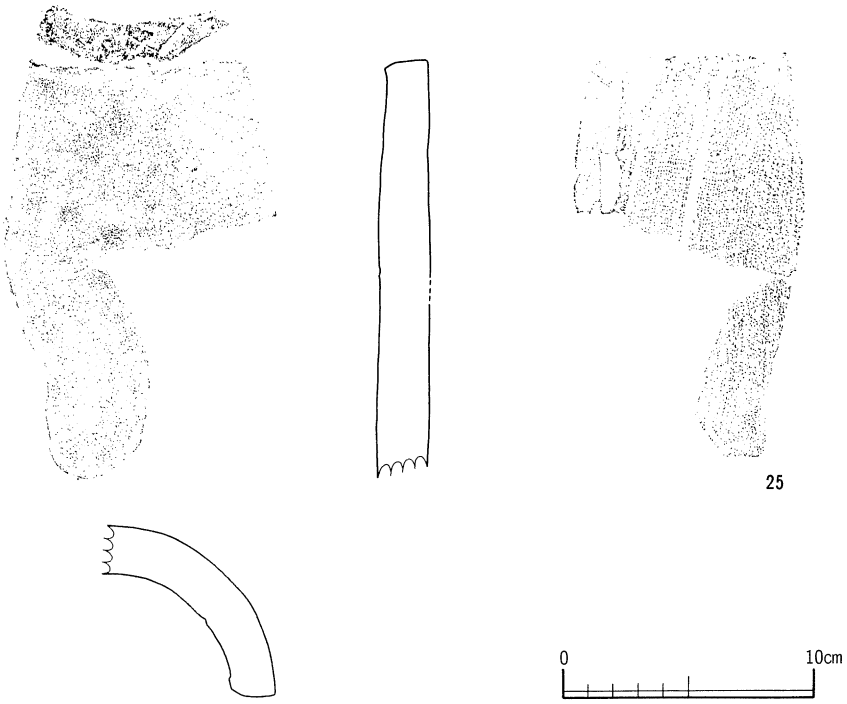
遺物は、土師器・須恵器の破片が多量に出土した。１～６は皿、７～18は杯、19～21は大ぶりの杯、22は須恵器の甕、23・24は灰釉陶器の長頸瓶、25は丸瓦である。４・７・16・17・18・19には墨書が見られ、７・８・９・14・19・22は床面、２・13は焼土部分、10・24は粘土部分からの出土である。



第9図　第7～9号竪穴住居跡実測図・第7・8号竪穴住居跡出土遺物



第10図　第９号竪穴住居跡出土遺物（１）



第11図　第９号竪穴住居跡出土遺物（２）

第１表　第９号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	器種	位置	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師	覆土 上層	口径　14.3 底径　5.9 器高　1.8	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　7.5YR7/4にぶい橙 焼成　良好	口縁～体部 1/3欠損
2	皿 土師	焼土 中	口径　14.1 底径　6.2 器高　2.6	体部―ロクロ成形→下半回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　7.5YR7/4にぶい橙 焼成　良好	口縁～体部 2/3欠損
3	皿 土師	一括	口径　〈14.0〉 底径　〈6.7〉 器高　2.4	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　細砂粒を少量含む 色調　7.5YR7/6橙 焼成　良好	1/3遺存
4	皿 土師	８住 内	口径　〈14.5〉 底径　6.6 器高　2.5	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　白色微粒を僅かに含む 色調　7.5YR6/6橙 焼成　良好	1/3遺存 底部に墨書
5	皿 土師	覆土 上層	口径　〈13.7〉 底径　〈5.2〉 器高　2.0	体部―ロクロ成形→内面ミガキ 底部―回転糸切り	胎土　細礫を僅かに含む 色調　内5YR6/3にぶい橙 外2.5YR6/6橙 焼成　良好	1/4遺存
6	皿 土師	一括	口径　〈14.2〉 高台径〈7.8〉 器高　2.3	体部―ロクロ成形→内面ミガキ 底部―切り離し不明→高台貼り付け	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　内5YR6/6橙 外7.5YR7/4にぶい橙 焼成　良好	1/4遺存
7	杯 土師	床面	口径　13.0 底径　6.6 器高　4.3	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　白色微粒を少量含む 色調　7.5YR7/6橙 焼成　良好	完形 体部に墨書
8	杯 土師	床面	口径　14.1 底径　7.5 器高　5.1	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土　白色微粒を少量含む 色調　7.5YR7/6橙 焼成　良好	完形

番号	器種	位置	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	杯 土師	床面	口径 14.1 底径 7.5 器高 5.1	体部―ロクロ成形→下半回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 細砂粒を少量含む 色調 7.5YR7/6橙 焼成 良好	完形
10	杯 土師	粘土 中	口径 〈14.0〉 底径 〈7.4〉 器高 4.2	体部―ロクロ成形→下半回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 密 色調 内5YR5/4にぶい赤褐 外5YR5/2灰褐 焼成 良好	1/5遺存
11	杯 土師	一括	口径 〈13.2〉 底径 6.8 器高 4.3	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 細砂粒を僅かに含む 色調 10YR6/3にぶい黄橙 焼成 良好	口縁～体部 4/5欠損
12	杯 土師	覆土 上層	口径 〈13.0〉 底径 〈6.4〉 器高 3.9	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明	胎土 密 色調 7.5YR6/4にぶい橙 焼成 良好	口縁～底部 1/3遺存
13	杯 土師	焼土 中	口径 14.8 底径 7.0 器高 4.5	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り →手持ち篦削り	胎土 細砂粒を少量含む 色調 内5YR5/2灰褐 外5YR6/4にぶい橙 焼成 良好	完形
14	杯 土師	床面	口径 〈14.8〉 底径 〈6.8〉 器高 5.3	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り	胎土 細砂粒を少量含む 色調 7.5YR6/6橙 焼成 良好	口縁～体部 1/3遺存
15	杯 土師	覆土 下層	口径 〈16.8〉 底径 〈8.5〉 器高 4.8	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り	胎土 細砂粒を少量含む 色調 7.5YR6/4にぶい橙 焼成 良好	口縁～体部 1/4遺存
16	杯 土師	一括	口径 ― 底径 〈6.8〉 器高 ―	底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 密 色調 10YR6/4にぶい黄橙 焼成 良好	底部遺存 底部に墨書
17	杯 土師	一括	口径 ― 底径 〈7.2〉 器高 ―	底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 細砂粒を僅かに含む 色調 10YR6/4にぶい黄橙 焼成 良好	底部遺存 底部に墨書
18	杯 土師	覆土 中層	口径 ― 底径 〈7.1〉 器高 ―	体部―下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 密 色調 10YR6/4にぶい黄橙 焼成 良好	底部付近 1/5遺存 底部に墨書
19	杯 土師	床面	口径 〈20.0〉 底径 〈9.0〉 器高 7.0	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 細砂粒を僅かに含む 色調 7.5YR7/6橙 焼成 良好	1/3遺存 底部に墨書
20	杯 土師	覆土 上層	口径 〈20.0〉 底径 〈9.8〉 器高 7.0	体部―ロクロ成形→下端回転篦削り →内面ミガキ	胎土 細砂粒を僅かに含む 色調 内10YR4/1灰褐 外10YR4/2灰黄褐 焼成 良好	口縁～体部 1/3遺存
21	杯 土師	8住 内	口径 〈23.0〉 底径 9.6 器高 8.3	体部―ロクロ成形→下半回転篦削り 底部―切り離し不明→回転篦削り	胎土 細砂粒を少量含む 色調 内5YR6/6橙 外5YR5/2灰褐 焼成 良好	口縁～体部 3/4欠損
22	甕 須恵	床面	口径 〈21.9〉 底径 ― 器高 ―	口縁部―横ナデ 胴部―上半タタキ、下半横位篦削り 内面―指頭圧痕	胎土 細砂粒を少量含む 色調 10YR4/2灰黄褐 焼成 良好	口縁～胴部 1/4遺存 器面荒れ
23	長頸 瓶 灰釉	覆土 上層	口径 ― 高台径 7.7 器高 ―	胴部―ロクロ成形→横位篦削り 底部―回転篦削り→高台貼り付け	胎土 細砂粒を少量含む 色調 5Y7/1灰白 焼成 堅緻	胴部下位～ 底部遺存
24	長頸 瓶 灰釉	粘土 中	口径 ― 高台径 8.4 器高 ―	胴部―ロクロ成形→横位篦削り 底部―回転篦削り→高台貼り付け	胎土 白色細礫を含む 色調 内2.5Y5/1黄灰 外10YR5/1褐灰 焼成 堅緻	胴部下位～ 底部遺存

2　竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第12図）

調査区の中央西寄りに位置し、第４号竪穴住居跡を切り、第６号土坑に切られる。規模2.5×2.0m・壁高0.26mを測り、長方形を呈する。主軸方位はN－25°－Eである。壁はやや開くように立ち上がる。

周溝・柱穴は検出されなかった。

床面はソフトローム中で、やや軟弱である。

遺物は、１の小皿が覆土上層から出土したほかは、微細な土器片がわずかに出土したのみである。

第２表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	位置	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	小皿 土師	覆土 上層	口径　〈9.2〉 底径　〈4.4〉 器高　1.7	体部―ロクロ成形 底部―回転糸切り	胎土　橙色粒を少量含む 色調　内7.5YR5/3にぶい褐 外10YR5/3にぶい黄褐 焼成　良好	1/4遺存

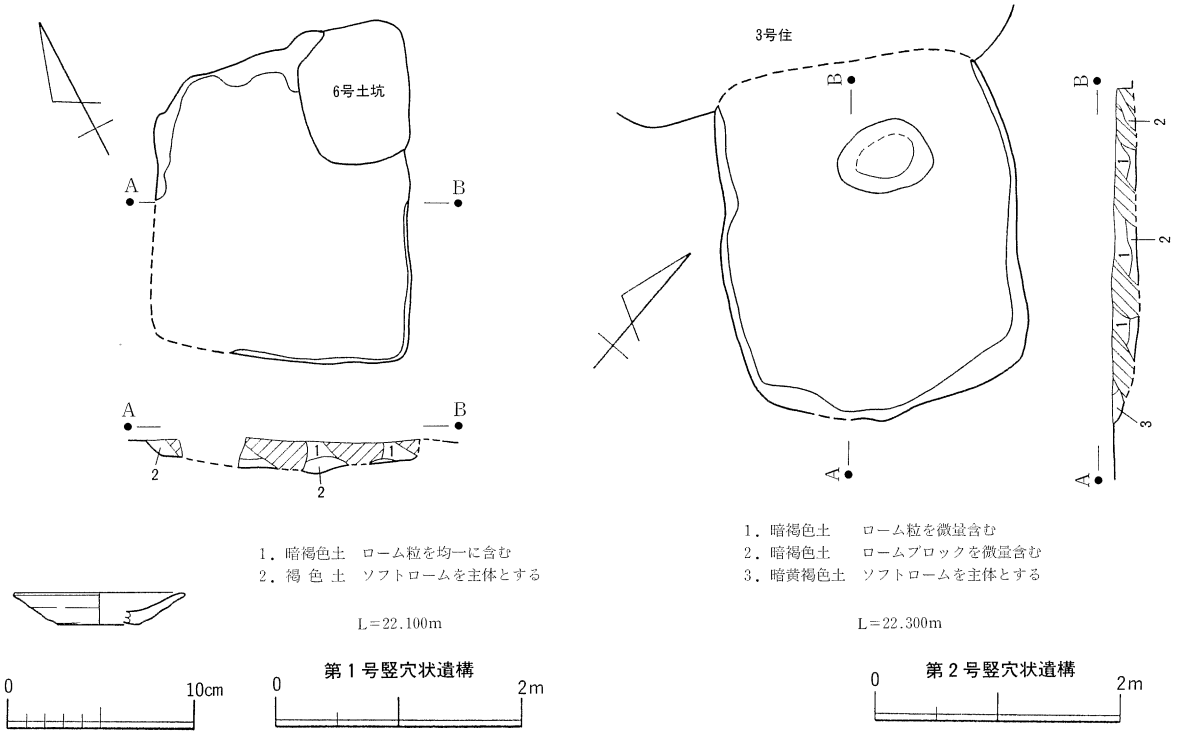
第２号竪穴状遺構（第12図）

調査区の中央に位置し、第３号竪穴住居跡を切る。北西壁が不明瞭なため、長軸長は不明である。短軸長2.42m・壁高0.16mを測り、不整長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－45°－Wである。壁は緩やかに開くようにして立ち上がる。

周溝・柱穴は検出されなかった。

床面はソフトローム中で、やや軟弱である。中央北寄りには78×57cm・深さ11cmを測る楕円形の掘り込みが見られた。

遺物は、微細な土器片と鉄滓がわずかに検出されたのみである。



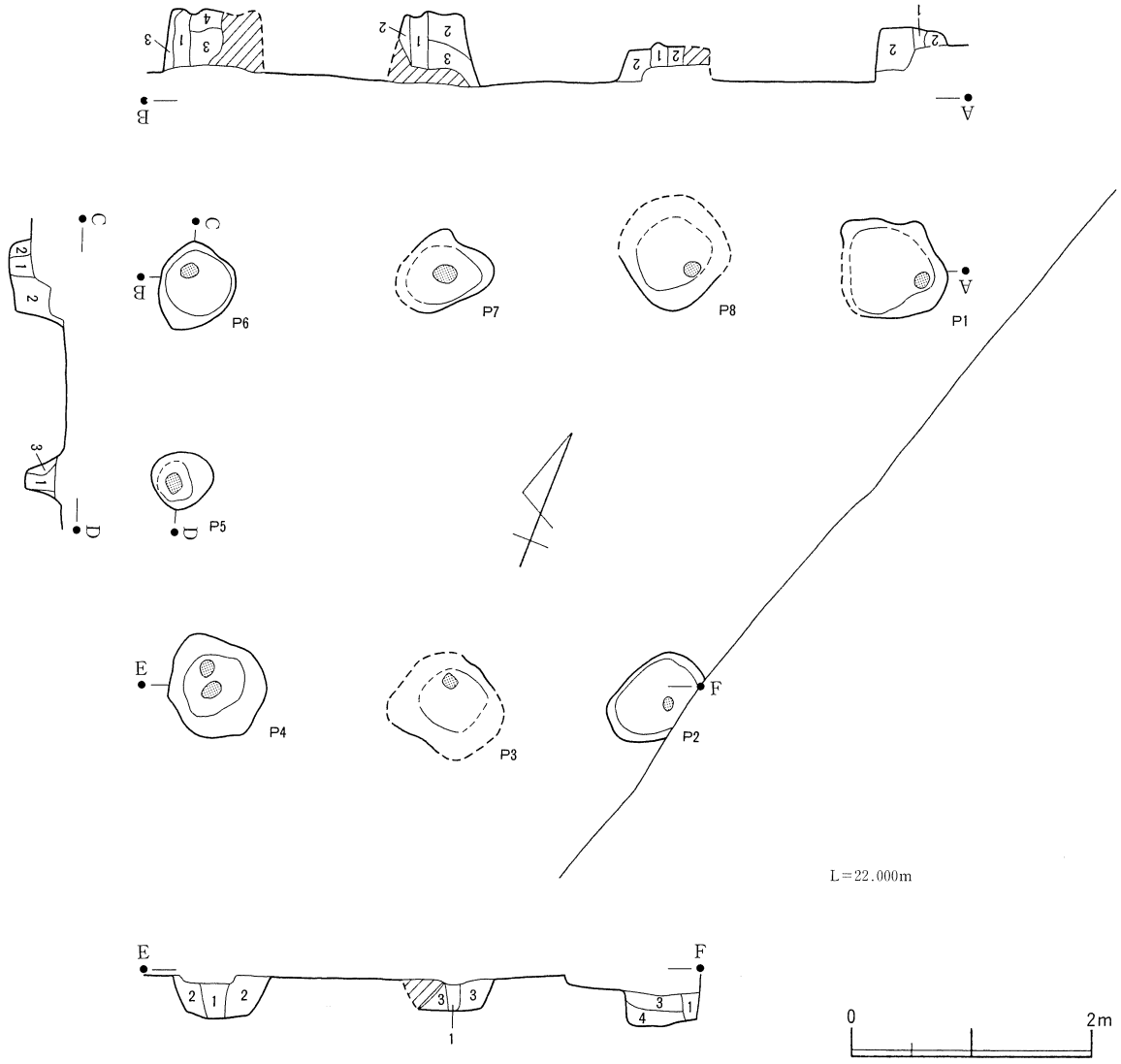
第12図　第１・２号竪穴状遺構実測図・出土遺物

3　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第13図）

調査区の北東寄りに位置し、第１・２号竪穴住居跡を切る。東側は調査区域外へ延びるため、正確な規模・構造は不明であるが、梁行２間×桁行３間の東西棟と考えられ、方形の側柱の建物である。規模は現状で梁行3.6m、桁行6.1mを測る。柱間は、梁行1.8m、桁行2.0mを測り、等間隔に配置される。主軸方位はN－21°－Wである。

柱穴は径0.50～0.82mの不整円形を呈し、深さは0.34～0.74mを測る。いずれのピットにも明瞭な



1．黒褐色土　粗いローム粒を少量含む
2．暗褐色土　ローム粒を多く含む
3．黒褐色土　ローム粒を少量含む
4．黒褐色土　ロームブロックを多く含む

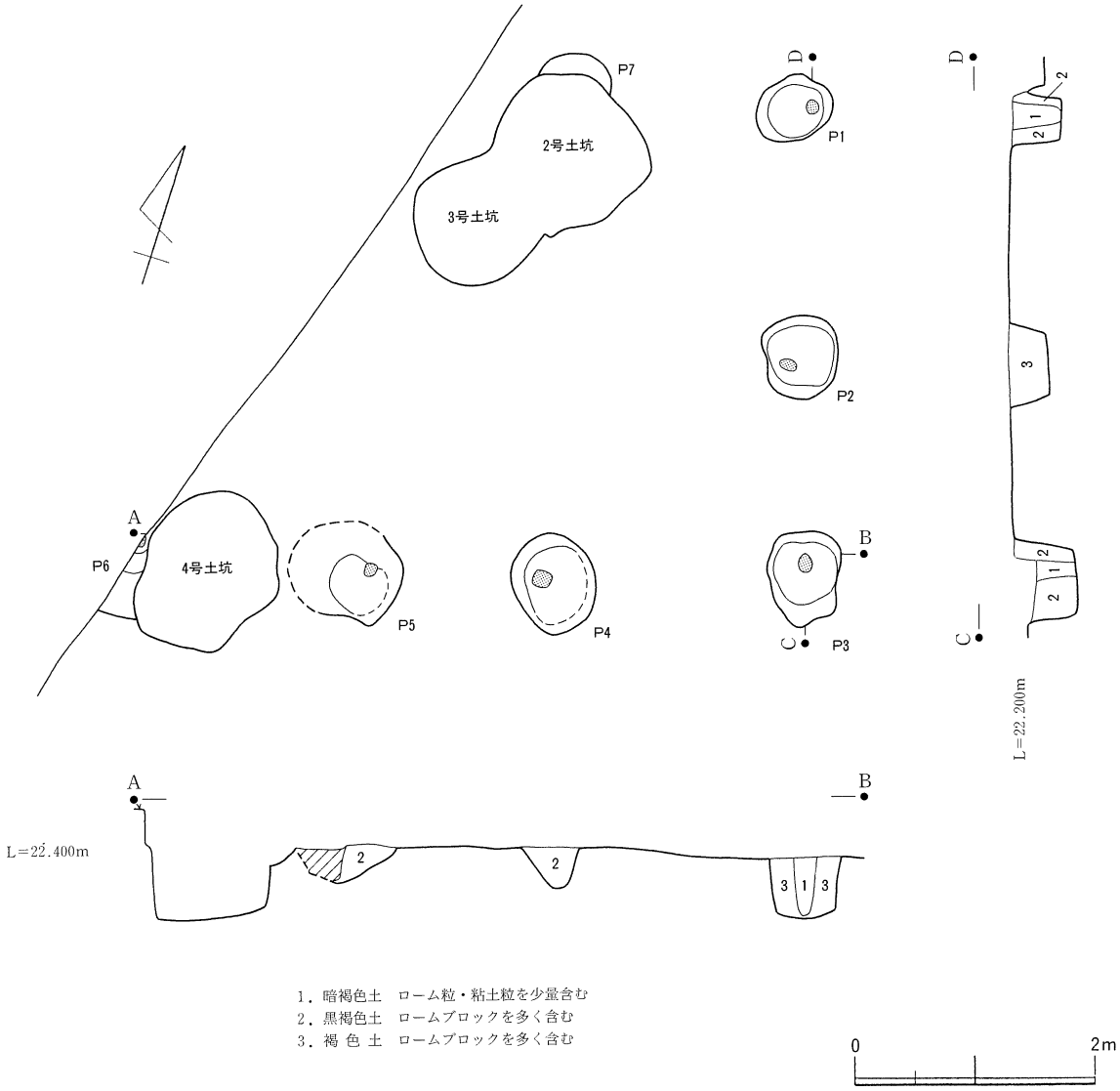
第13図　第１号掘立柱建物跡実測図

柱痕が認められた。

遺物は、柱穴内から土師器・瓦の細片と鉄滓がわずかに出土したのみである。

第２号掘立柱建物跡（第14図）

調査区の北西寄りに位置し、第１号竪穴住居跡を切り、第２・４号土坑に切られる。西側は調査区域外へ延びる。梁行２間×桁行３間の東西棟と思われる構造で、方形の側柱の建物である。先の第２次調査の際に報告された14号土坑、あるいはさらに西側に位置する13号土坑が、北西隅の柱穴にあたるものと思われる（第３図）。規模は梁行3.8m、桁行は第２次調査区の14号土坑までで5.5mを測る。柱間は不等間隔で、梁行2.1m・1.7m、桁行1.9m・1.5m・2.1mを測る。主軸方位はN－16°－Wである。



第14図　第２号掘立柱建物跡実測図

柱穴は径0.51～0.80mの不整円形を呈し、深さは0.36～0.58mを測る。いずれのピットにも明瞭な柱痕が認められた。

遺物は、柱穴内から微細な土器片がわずかに出土したのみである。

第3号掘立柱建物跡（第15図）

調査区の南西隅に位置し、第4・5号竪穴住居跡を切る。南西側は調査区域外へ延びるため、正確な規模・構造は不明であるが、梁行3間×桁行3間ないしそれ以上の南北棟と考えられ、方形の側柱の建物である。規模は梁行4.2mを測る。柱間は、梁行1.4m、桁行1.8mを測り、等間隔に配置される。主軸方位はN－30°－Wである。

柱穴は径0.80～0.90mの不整円形を呈し、深さは0.37～0.63mを測る。明瞭な柱痕を持つものが多く認められ、また複数有するものもあり、建て替えが行なわれたものと思われる。

遺物は、柱穴内から微細な土器片がわずかに出土したのみである。

4　土坑

第1号土坑（第16図）

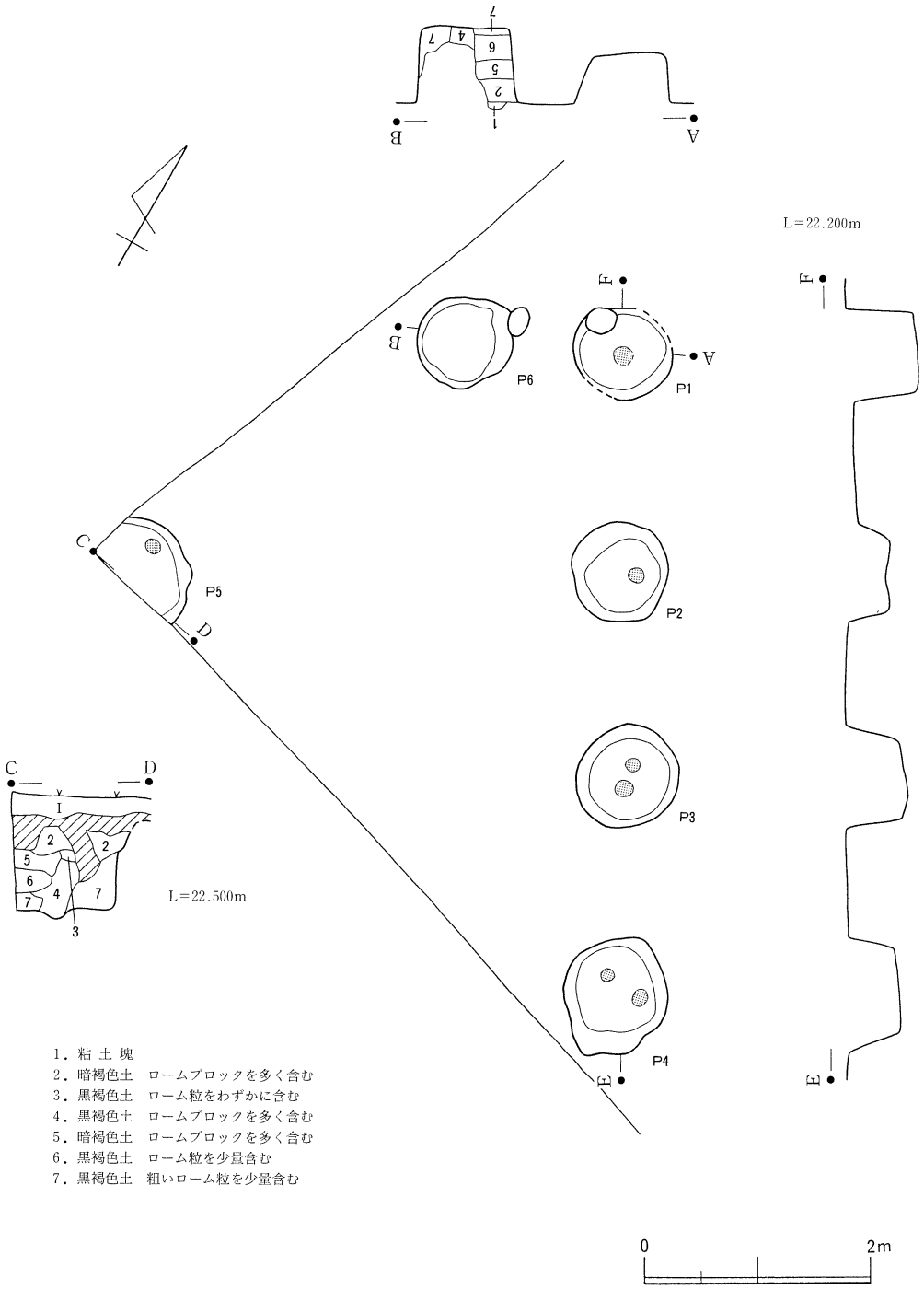
調査区の北東隅に位置し、北側は調査区域外に延びるため、規模は不明である。壁高0.23mを測り、壁はやや開くように立ち上がる。主軸方位はN－4°－Eである。遺物は、1の高杯、2・3の杯、4の須恵器の蓋、5・6の支脚が覆土中～下層から出土している。

第3表　第1号土坑出土遺物観察表

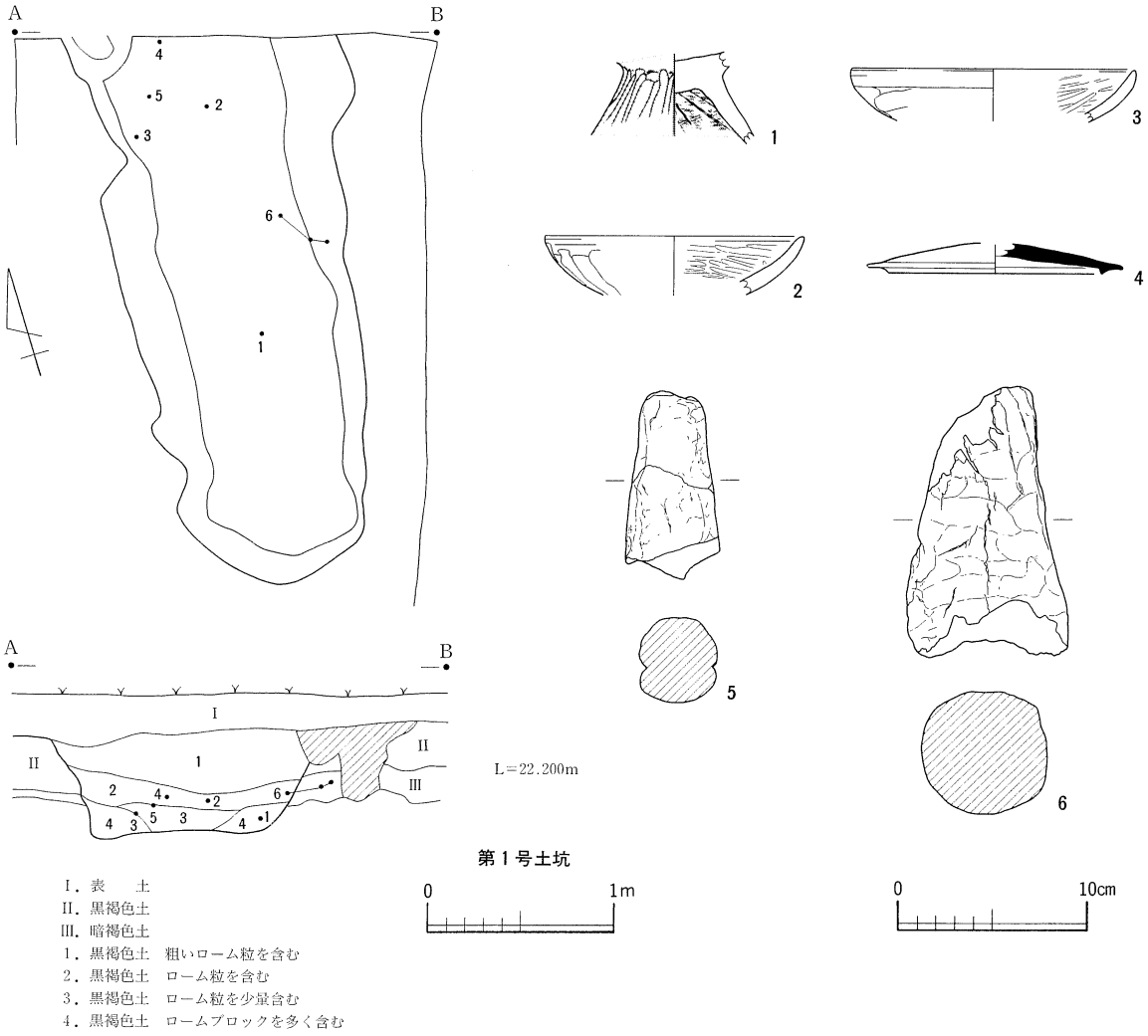
番号	器種	位置	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高杯 土師	覆土 下層	口径　— 底径　— 器高　—	脚部—縦位篦削り 内面—篦ナデ	胎土　細砂粒を少量含む 色調　2.5YR5/6明赤褐 焼成　良好	脚柱部上半 遺存 内外面赤彩
2	杯 土師	覆土 中層	口径　〈13.8〉 底径　— 器高　—	口縁部—横位ナデ 体部—縦位篦削り 内面—ミガキ	胎土　細砂粒を少量含む 色調　7.5YR4/1褐灰 焼成　良好	体部1/6 遺存
3	杯 土師	覆土 下層	口径　〈15.1〉 底径　— 器高　—	口縁部—横位ナデ 体部—横位篦削り 内面—ミガキ	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　5YR6/4にぶい橙 焼成　良好	体部1/6 遺存
4	蓋 須恵	覆土 中層	口径　〈13.6〉 器高　—	体部—ロクロ成形 天井部外面—回転篦削り	胎土　白色粒を僅かに含む 色調　2.5Y6/1黄灰 焼成　堅緻	口縁～体部 1/10遺存

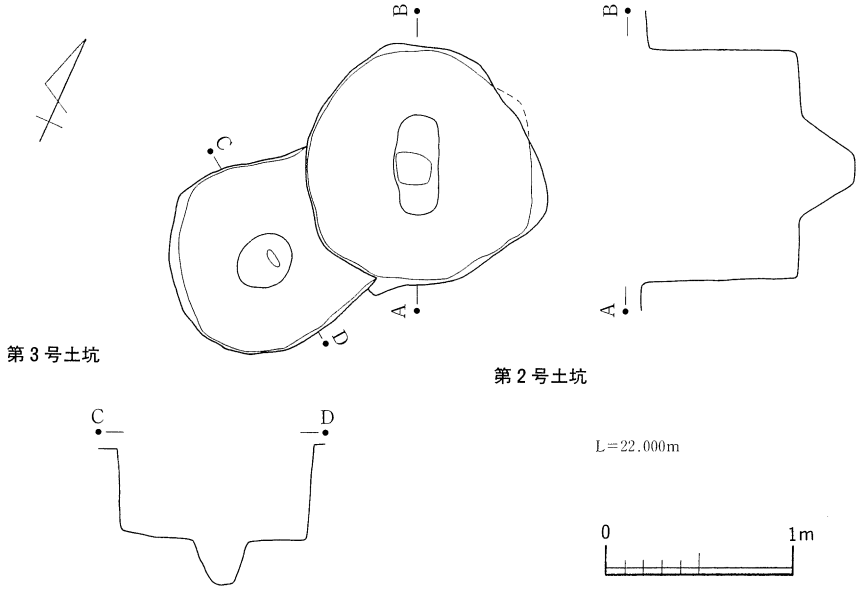
第2号土坑（第16図）

調査区の中央西隅に位置し、第2号掘立柱建物跡・第3号土坑を切る。径1.25m・壁高0.83mを測り、不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平坦な底面の中央には、52×23cm・深さ28cmを測る長方形の掘り込みが見られた。遺物は、微細な土器片、骨片、鉄片がわずかに出土するのみである。



第15図　第３号掘立柱建物跡実測図





第16図　第1～3号土坑実測図・出土遺物

第３号土坑（第16図）

調査区の中央西隅に位置し、第２号土坑に切られる。径1.02m・壁高0.52mを測り、不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平坦な底面の中央には径30cm・深さ22cmを測る不整円形の掘り込みが見られた。遺物は出土していない。

第４号土坑（第17図）

調査区の中央西隅に位置し、第２号掘立柱建物跡、第５号土坑を切る。径1.14m・壁高0.60mを測り、不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平坦な底面の中央には23×15cm・深さ20cmを測る長楕円形の掘り込みが見られた。遺物は出土していない。

第５号土坑（第17図）

調査区の中央西隅に位置し、第４号土坑に切られる。西側は調査区域外に延びるため規模は不明である。壁高0.23mを測り、方形を呈するものと思われる。壁はやや開くように立ち上がる。遺物は、微細な土師器片、鉄滓がわずかに出土するのみである。

第６号土坑（第17図）

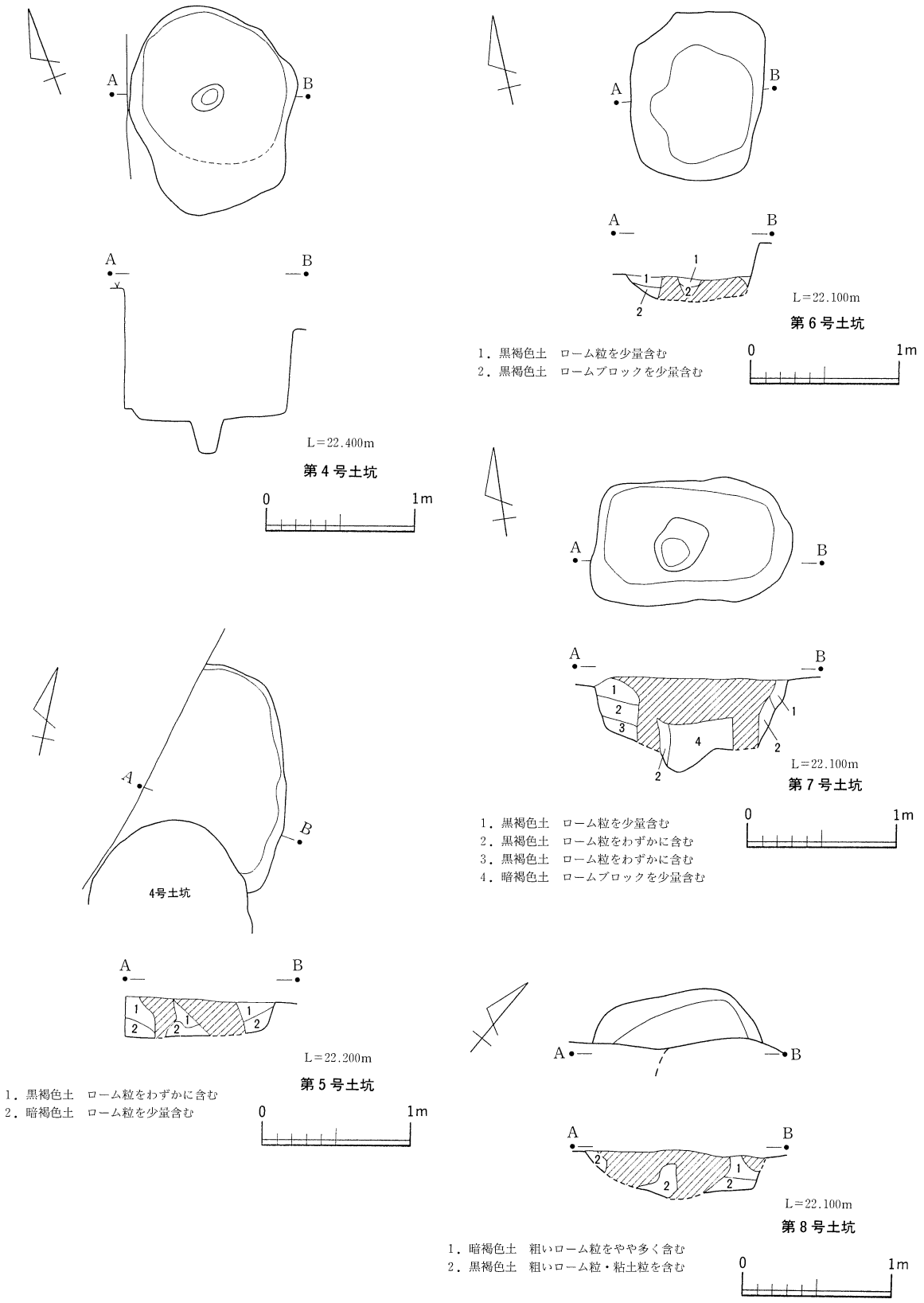
調査区の中央西寄りに位置し、第１号竪穴状遺構を切る。規模1.10m×0.88m・壁高0.4mを測り、不整方形を呈する。主軸方位はN－18°－Eである。壁は緩やかに開くようにして立ち上がる。遺物は、微細な土師器片がわずかに出土するのみである。

第７号土坑（第17図）

調査区の中央南寄りに位置し、第４号竪穴住居跡を切る。規模1.30m×0.83m・壁高0.5mを測り、不整長方形を呈する。底面は壁の下端から中央部に向かってやや傾斜し、中央には径30cm・深さ17cmを測る掘り込みが見られた。主軸方位はN－79°－Wである。壁はやや開くようにして立ち上がる。遺物は、回転糸切り無調整の土師器底部細片のほか、微細な土師器片がわずかに出土するのみである。

第８号土坑（第17図）

南側調査区の中央北寄りに位置し、第８・９号竪穴住居跡を切る。第９号竪穴住居跡調査途中に検出されたため、規模は不明である。壁高0.22mを測り、不整長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－25°－E程度を測るものと思われる。壁はやや開くようにして立ち上がる。遺物は出土していない。



第17図　第4～8号土坑実測図

5　遺構外出土の遺物（第18図）

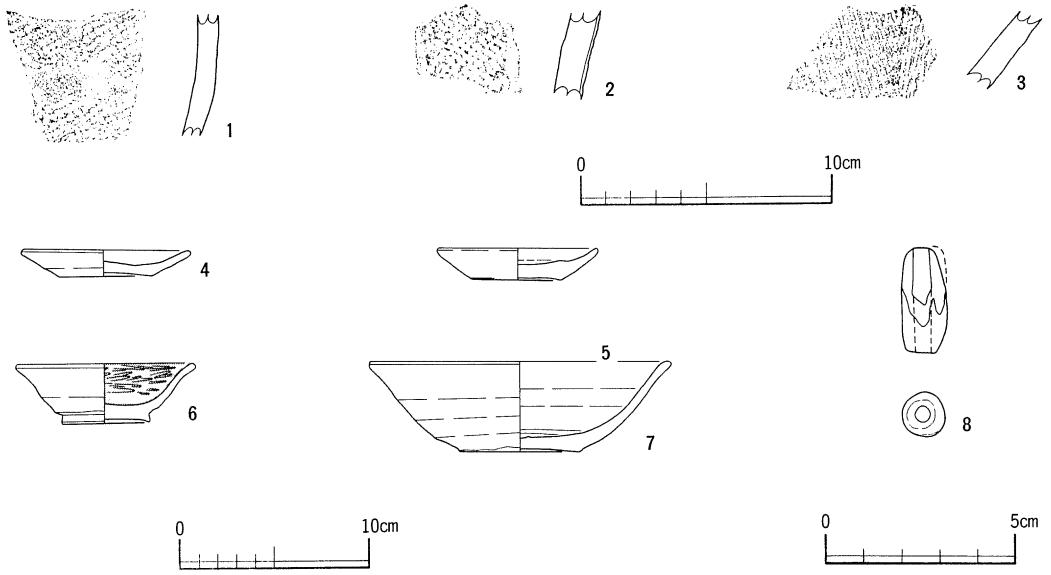
調査区域内はトレンチャーによる激しい攪乱を受けており、出土した遺物も細片が多数を占め、図示しうるものは少数である。

1～3は中期後半に比定される縄文土器である。1・2は深鉢形土器の胴部破片で、2には単節RL縄文を地文に沈線が垂下されており、磨消懸垂文が施されるものと考えられる。3は浅鉢形土器の破片で、器面には櫛状工具による縦位の条線文が施される。

4・5は土師器の小皿、6は削り出し高台付杯、7は杯である。8は現存長2.8cm・幅1.2cm・孔径0.5cm・現存重量2.4gを測る管状土錘である。4は表採、5・7は第5号竪穴住居跡周辺、6・8は第1号竪穴住居跡周辺からの出土である。

第4表　遺構外出土遺物観察表

番号	器種	位置	法量(cm)	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	小皿 土師	表採	口径　〈8.6〉 底径　〈4.7〉 器高　1.7	体部―ロクロ成形 底部―回転糸切り	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　7.5YR7/4にぶい橙 焼成　良好	1/2遺存
5	小皿 土師	5住 周辺	口径　8.9 底径　4.8 器高　1.5	体部―ロクロ成形 底部―回転糸切り	胎土　細砂粒を少量含む 色調　5YR6/6橙 焼成　良好	口縁～体部 1/3欠損
6	杯 土師	1住 周辺	口径　9.5 高台径　4.5 器高　3.2	体部―ロクロ成形→下端回転削り →内面ミガキ 底部―回転糸切り→高台作り出し	胎土　白色微粒を僅かに含む 色調　内5Y2/1黒 外7.5YR6/4にぶい橙 焼成　良好	口縁～体部 1/2欠損 内面黒色処理
7	杯 土師	5住 周辺	口径　〈16.0〉 底径　6.4 器高　4.8	体部―ロクロ成形→内面底部回転篦削り 底部―回転糸切り	胎土　細砂粒を僅かに含む 色調　7.5YR7/4にぶい橙 焼成　良好	口縁～体部 2/3欠損



第18図　遺構外出土遺物

Ⅴ まとめ

今回の調査面積はわずか380㎡の範囲であったが、弥生時代後期の竪穴住居跡７軒、古墳時代後期の土坑１基、奈良・平安時代の竪穴住居跡２軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡３棟、時期不明の土坑７基、ピット群が検出された。

弥生時代の遺構は、第１・２・３・４・５・７・８号竪穴住居跡がこれにあたる。いずれの遺構もおおむね平面長楕円形を呈するが、主柱穴を持つものと持たないものの２種類が見られる。遺構は調査区全域に広がり、隣接する第２次調査区や西側に位置する第１次調査区においても検出されていることから、当該期の集落が台地上に広く展開していることが予想される。

古墳時代の遺構の存在については、これまで周辺ではあまり知られていなかったが、第３次調査の際に後期に帰属するとされる住居跡が１軒検出されており、また今回検出された第１号土坑がこの時期に当たるものと考えられる。この土坑は北側が調査区域外に延びるため、或いは溝状遺構の端部の可能性も考えられるが、性格は不明である。覆土中層～下層にかけて高杯・杯・かえりを持つ須恵器蓋・支脚が出土しており、７世紀後半の時期が考えられる。これまでに行なわれた調査から見ると、全体に当該期の遺構の分布密度は薄いと見られる。

奈良・平安時代の遺構は、第６・９号竪穴住居跡、第１・２号竪穴状遺構、第１・２・３号掘立柱建物跡がこれに当たると思われる。第９号竪穴住居跡からは、多量の土器が出土しており、この中には墨書土器が多く出土したほか、灰釉陶器や千葉市域産の須恵器などが含まれる。皿・杯ともに体部下端～底部を回転篦削りによって整形するものが主体となり、田所編年坊作遺跡Ⅴ期（９世紀中葉前後）に当たるものと思われる。

２基の竪穴状遺構は、掘り込みも浅く、床面の硬化も確認されない。またカマドなどの施設も伴わず、恒常的な生活痕は見られない。トレンチャーによる攪乱のため出土遺物もほとんど見られないが、図示しうる土師器の小皿が１点のみ出土している。これも覆土上層からの検出であるため不確定要素があるが、小皿の存在から11世紀前後まで下るものと考えられる。おおむね同時期の遺構は、第２次調査区においても検出されており、これらは平面長方形を呈するものや、炉跡を有するものなどがあり、軽石や鉄滓が検出されるなど特徴的な様相を示している。

第１・２号掘立柱建物跡は規模・時期ともに明確ではないが、現状で確認されている部分においては、規模や軸線が類似しており、東西方向に直線的に配置されているようにも見られることから、第２次調査区において検出された掘立柱建物跡も含めて、近接した時期、或いは同時期に存在していた可能性が考えられる。

第３号掘立柱建物跡についても規模・時期ともに明確ではないが、第２次調査区で検出され、本遺構の北側に位置する、８世紀中葉前後とされる住居跡と軸線が類似しており、同一時期に帰属する可能性も考えられる。

いずれの掘立柱建物跡も遺物を伴わないため、帰属時期・新旧関係ともに明確にはならない。第２次調査の報文においても、掘立柱建物跡と住居跡の新旧関係は不確実とされているが、この掘立柱建物跡は８世紀中葉前後とされる住居跡を切ると考えられることや、第３号掘立柱建物跡はしっかりとした柱穴の掘り方を持つことから、おそらく第１・２号掘立柱建物跡は第３号掘立柱建物跡に後出す

るものと思われる。

調査区内において８基検出された土坑については、第１号土坑を除き、その多くは帰属時期が明らかにならないが、切り合い関係から第２・３・４・５号土坑は第２号掘立柱建物跡廃絶以降、第６号土坑は第１号竪穴状遺構を切ることから11世紀初頭以降、第７号土坑は出土遺物から、８号土坑は第９号竪穴住居跡を切ることから９世紀中葉以降と考えられる。このうち第２・３・４号土坑は、形態が類似しており、近接した時期と考えられる。また第２号土坑から骨片が出土することから、これらは墓壙の性格を持つ可能性がある。

墨書土器等について（第19図）

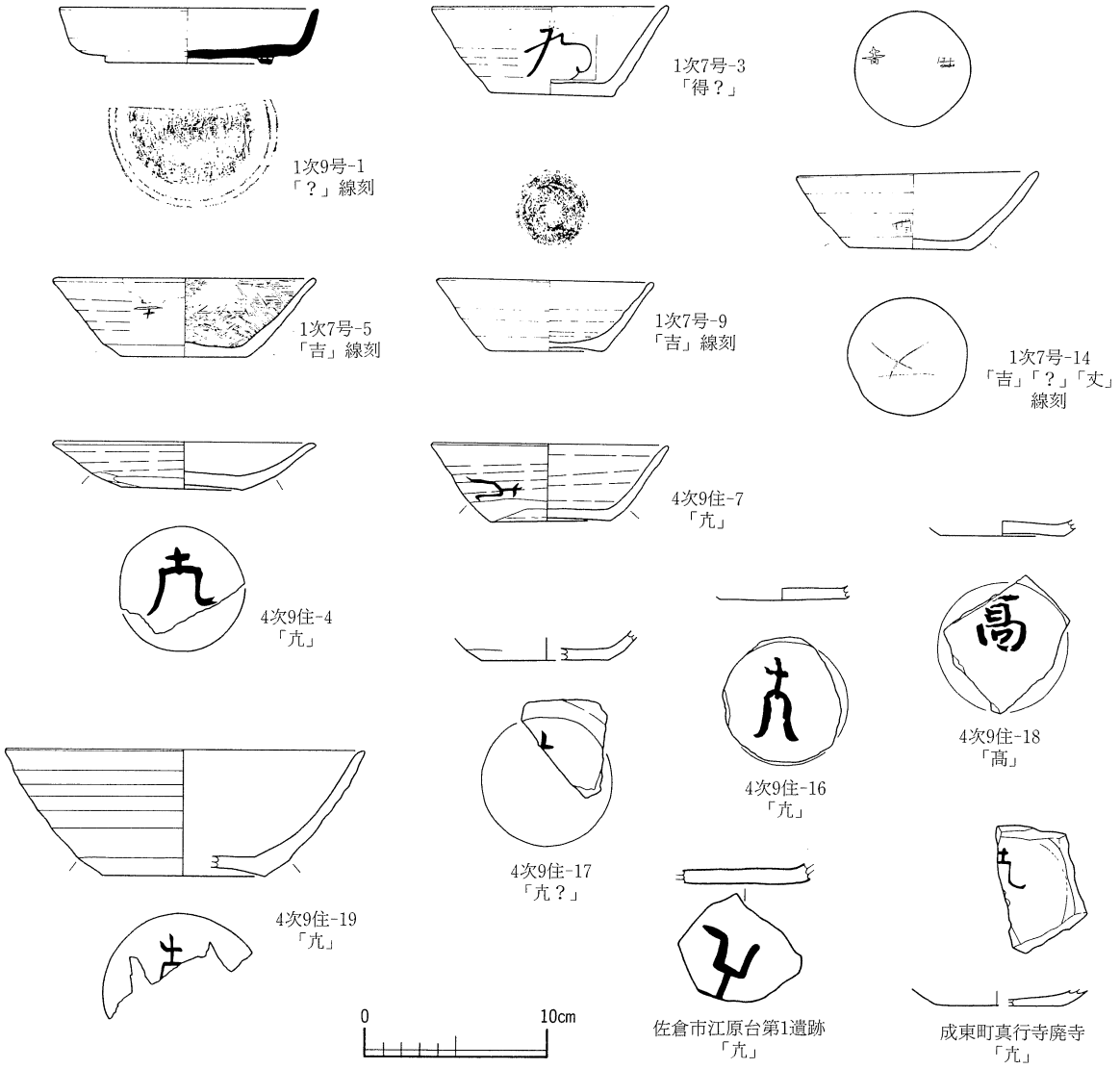
これまでの郡本遺跡の調査における出土文字資料としては、第１次調査区から墨書土器１点、線刻土器４点が検出されている。このうち１点は須恵器の高台付杯の底部に線刻がなされるが字形は不明である。残る４点は同一住居内から検出されたもので、この住居跡からは金銅製の帯金具も出土している。１点のみ出土した墨書土器は、「得」の草書体と思われる字が体部に見られる。残る３点には「吉」の線刻がなされ、このうちの１点には「丈」の字も底部に認められる。「得」の字については、仏教的色彩の強いものと考えられており、上総国分僧寺をはじめとして、周辺に数多く所在する寺院の影響による仏教思想の浸透とも考えられよう。

今回の調査においては５点の墨書土器が検出され、すべて第９号竪穴住居跡からの出土となっている。この内訳は「高」が１点と「亢」が４点となる。この「亢」の字形について平川南氏は、「大」の篆書体との関連のほか、則天文字や道教の呪符の影響と考え、一種の吉祥または呪術的な意味を含めた特殊な字形として使用していたものと捉えられている。この「亢」字は、県内では佐倉市江原台第１遺跡の９世紀前後と思われる住居跡や成東町真行寺廃寺の９世紀前半とされる鍛冶工房から出土しているほか、下総国府推定地である市川市和洋学園国府台キャンパス内遺跡第２次調査区においても、10世紀とされる住居跡から出土している。

則天文字など特殊文字の書かれる墨書土器の類例は、一般の文字に比べ遥かに少なく、どこの遺跡でも出土するという性格のものではないと考えられる。現状ではこの点について深く言及する術を持たないが、地方の郡家以下の官衙の墨書土器は、その周辺の集落遺跡とその文字内容など、共通する点が数多く認められるとされていることから、遺跡間における出土文字資料の検討は地方官衙を考える上でも重要な要素と考えられよう。

今回の調査においては、郡衙推定地としての郡本遺跡の性格を直接決定づけるものを検出することはできなかったが、380m²という狭い範囲を対象としたにもかかわらず、直線的に配置される掘立柱建物跡や特殊文字の書かれた墨書土器・灰釉陶器を伴う竪穴住居跡が検出されるなど、本遺跡の重要性がよりいっそう高まったものと捉えられよう。遺跡周辺はすでに市街化が進んでおり、広範囲な調査は望めないと思われるが、今後の調査にはいっそうの期待がもたれ、これまでの調査成果を含め、さらに広範囲な検討が必要となろう。

なお、本報文をまとめるにあたり、調査を担当された田中清美・小川浩一・北見一弘の各氏から御協力を頂くとともに、田所真氏からは多大なる御教示を頂いた。ここに記して感謝致します。



第19図　郡本遺跡他出土文字資料集成

〈引用・参考文献〉

小川浩一　1998　「郡本遺跡（第３次）」「郡本遺跡（第４次）」『平成９年度　市原市内遺跡発掘調査報告』　市原市教育委員会

木對和紀　1987　『市原市郡本遺跡』　㈶市原市文化財センター

㈶千葉県史料研究財団　1996　『出土文字資料集成（「千葉県の歴史資料編古代」別冊）』千葉県

文化庁文化財保護部監修　1993　「特集　墨書土器の世界」『月刊　文化財』11　平成５年　№362　第１法規出版株式会社

駒見和夫　1998　「下総国府・国分寺周辺における竪穴建物群の動向」『房総文化』第20号　房総文化研究所

高橋健一　1979　「第４章　国分期の土器について　II．墨書土器の概要」『江原台』　佐倉市教育委員会

高橋康夫　1994　『市原市上総国府推定地確認調査報告書(1)』　㈶市原市文化財センター

田所　真　1987　「１　市原市坊作遺跡（旧市原郡）」『房総における歴史時代土器の研究』第１集　房総歴史考古学研究会

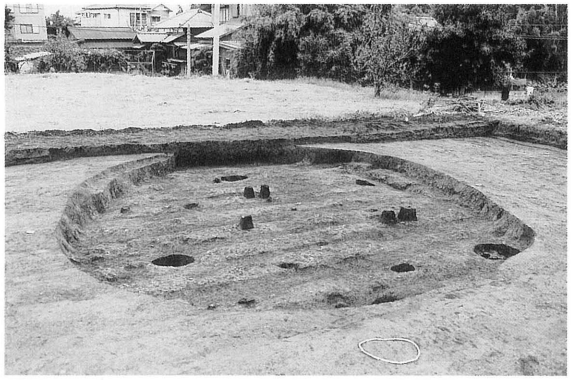
田中清美　1995　『市原市郡本遺跡（第２次）』　㈶市原市文化財センター

平川　南　1991　「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立歴史民俗博物館

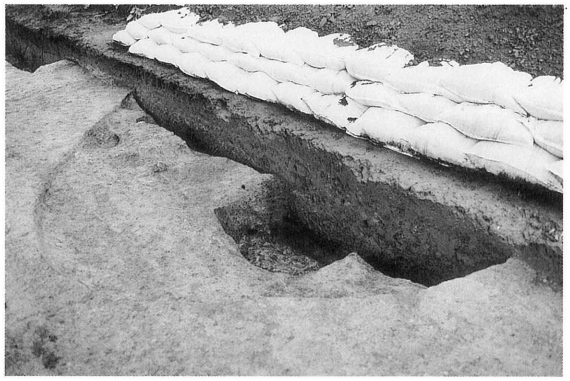
写 真 図 版

図版1

図版 2

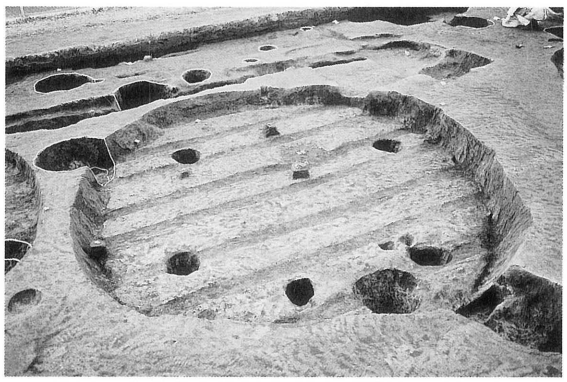


第 1 号竪穴住居跡



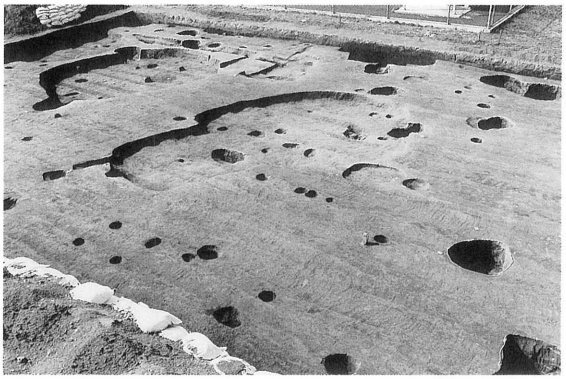
第 2 号竪穴住居跡

第 3 号竪穴住居跡

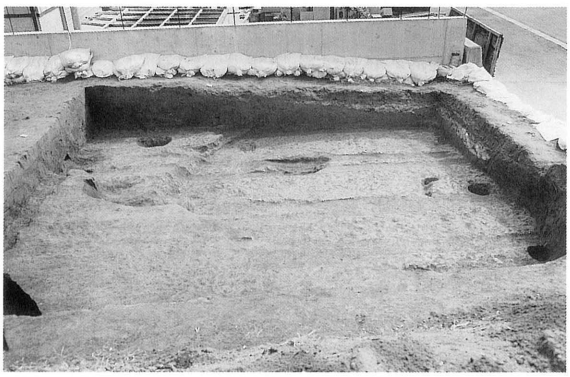


第 4 号竪穴住居跡

第 5 号竪穴住居跡

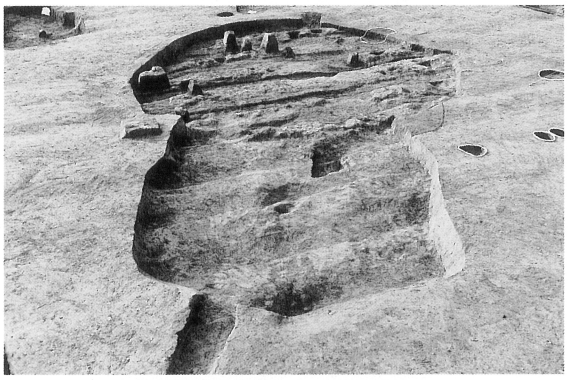


調査区全景



第 8 ・ 9 号竪穴住居跡

第 9 号竪穴住居跡遺物出土状況



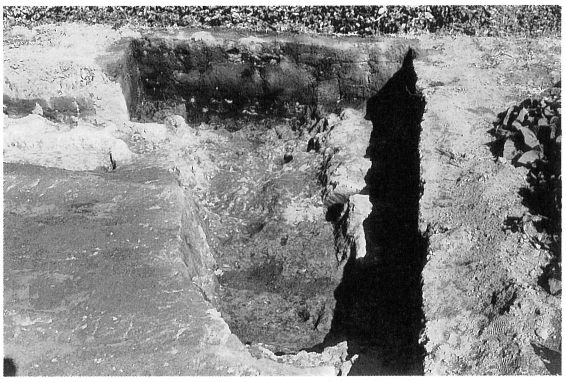
第 2 号竪穴状遺構

第 1 号掘立柱建物跡

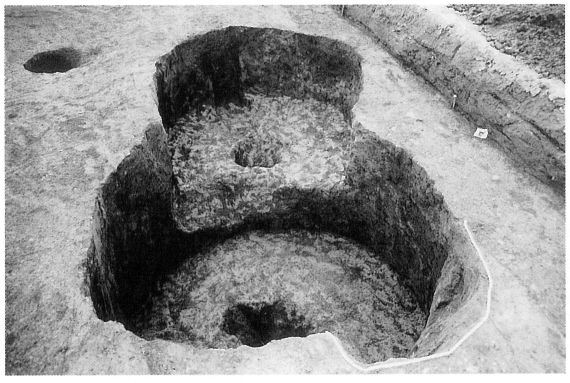
第 2 号掘立柱建物跡

第 1 ・ 2 号掘立柱建物跡

第 3 号掘立柱建物跡

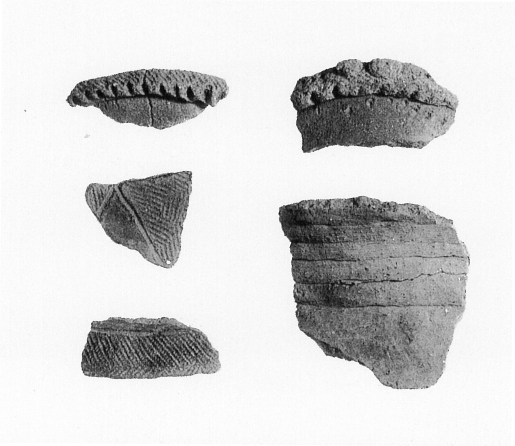


第 1 号土坑

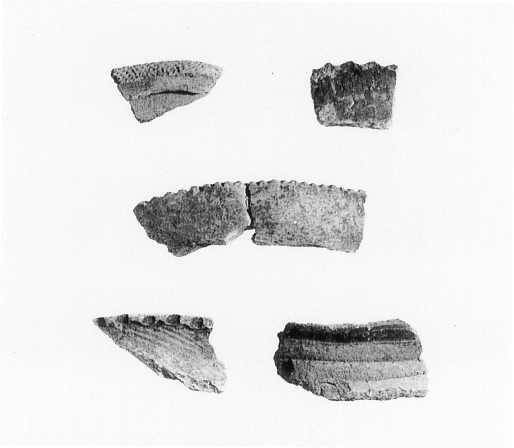


第 2 ・ 3 号土坑

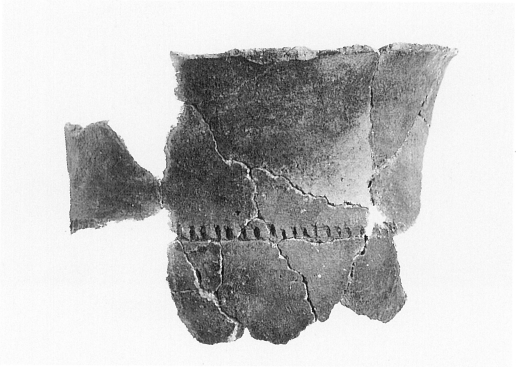
調査風景



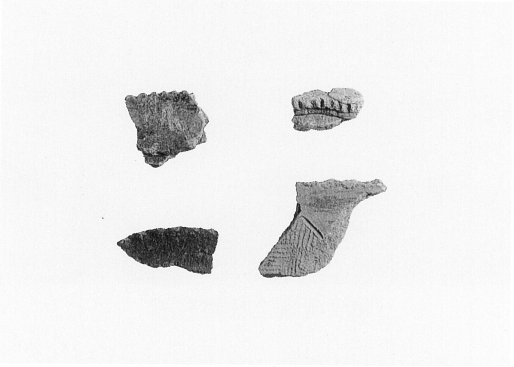
第 1 号竪穴住居跡出土遺物



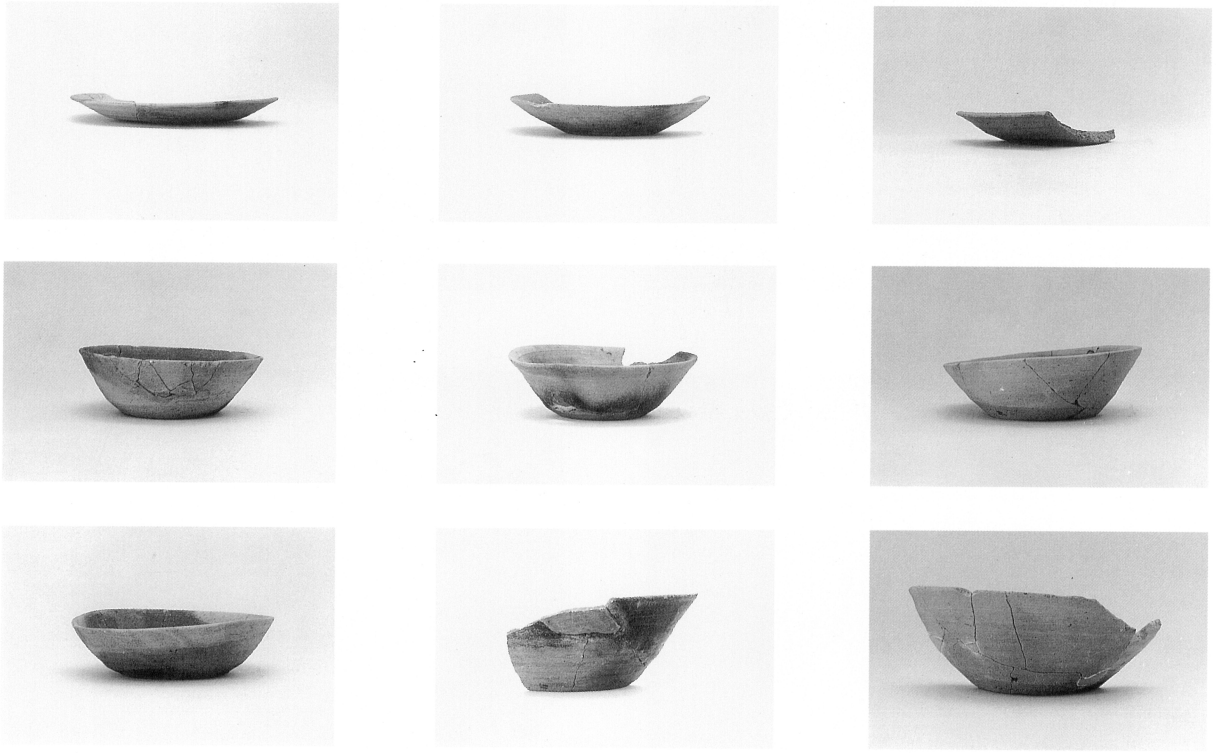
第 4 号竪穴住居跡出土遺物



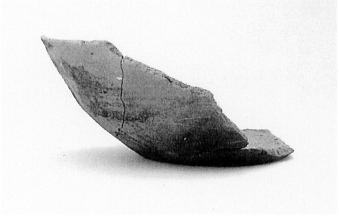
第 5 号竪穴住居跡出土遺物

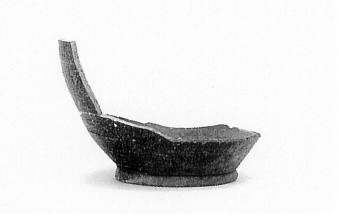


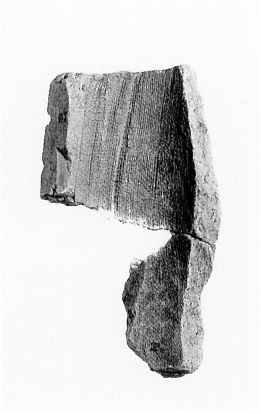
第 8 号竪穴住居跡出土遺物



第 9 号竪穴住居跡出土遺物（1）

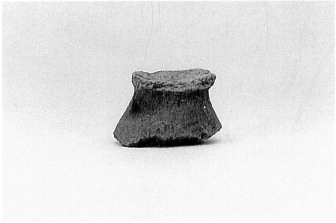
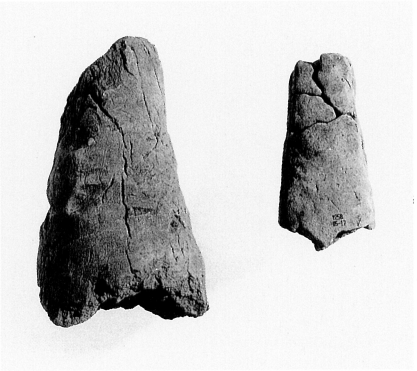




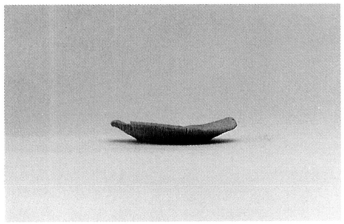


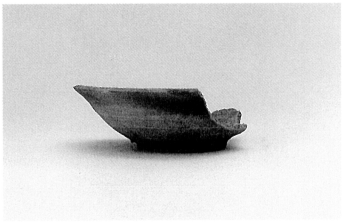
第 9 号竪穴住居跡出土遺物（2）

第 9 号竪穴住居跡出土墨書土器

第 1 号土坑出土遺物





遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いちはらしこおりもといせきだいよじ
書名	市原市郡本遺跡（第４次）
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第61集
編著者名	鶴岡英一
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL 0436(41)7300
発行年月日	1999年３月５日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
郡本遺跡（こおりもといせき）（第４次）（だいよじ）	千葉県市原市郡本３丁目201-1（ちばけんいちはらしこおりもとさんちょうめ）	12219	セ253	35度30分34秒	140度07分33秒	19970916～19971022	380	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡本遺跡（こおりもといせき）（第４次）（だいよじ）	集落跡	弥生時代後期～平安時代後半	竪穴住居跡　７軒 竪穴状遺構　２基 掘立柱建物跡　３棟 土坑　８基	弥生土器、土師器 須恵器、灰釉陶器 布目瓦、鉄滓、墨書土器など	当遺跡は、市原郡衙推定地である。柱筋のそろう掘立柱建物跡や特殊文字の墨書土器が多数出土した。

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第61集

市原市郡本遺跡（第４次）

平成11年２月18日　印刷
平成11年３月５日　発行

編集　財団法人　市原市文化財センター

発行　岡本吉男

財団法人　市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
TEL 0436(41)7300

印刷　株式会社　正文社
千葉県千葉市中央区都町2-5-5
TEL 043(233)2235